
召喚されただと!?

蓮条寺紫帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚されただど！？

【Nコード】

N7297S

【作者名】

蓮条寺紫帆

【あらすじ】

武術以外は普通の高校生、渚。ある日突然異世界に召喚されてしまい、そこで旅をすることに……。そして回りだす運命の齒車。それでも、全力で今を楽しむ渚。はたして、渚は元の世界に戻るのか！？厨二、誤字脱字が多いと思いますが、それでも良いという人はどうぞお読みください。

プログラマー!? (前書き)

まず、プロフィールだお

プロローグ！？

メインキャラ設定

阿良木 渚

年齢 / 17歳

性別 /

身長 / 180

特徴 / 赤髪「前髪：目にかかる 襟足：首の真ん中ぐらい」

三白眼「高〇君みたいな感じ」

特技 / 家事全般

直感「死角がなくなる」

戦闘スタイル / 阿良木流二刀技

この作品の主人公。

幼馴染とともに楽しく生活を送っていたが、突然異世界に召喚されてしまう。

いつでも冷静に状況を判断することができる。色恋沙汰には疎い。仲間を何よりも大切に思い、仲間を傷つける者には容赦しない。普段はおどけた態度で場を和ませるが、時々大真面目になる。強さは、一人で国を一つ滅ぼせるほど。

神崎 静香

年齢 / 17歳

性別 /

身長 / 158

特徴 / 黒髪「ショートヘア」

特技 / 暗記

戦闘スタイル / 弓

渚の幼馴染で、渚に想いを寄せている。が、渚はまったく気づかない。

渚が召喚される際、渚に引きずり込まれ、共に異世界に。馬鹿にされるとキレ、相手をボコボコにする。特に胸に関して馬鹿にした奴は、生死の境をさまようとか。

渚と同じく仲間思い。可愛いものが大好き。弓の射撃精度は百発撃てば百発狙ったところへ飛ばすことができる。

ユリウス・ラファイエ

年齢 / 16歳

性別 /

身長 / 152

特徴 / 白髪「腰までの長さ」

碧眼

特技 / 詠唱省略

戦闘スタイル / 魔術

魔導書に記された古の魔方陣を誤って起動させ、渚と静香を召喚してしまった。

魔法を幼少期から使っていた為、強力な魔術も詠唱せずに使うことができる。

人見知りが激しく、最初は渚と静香に怯えていた。

渚と静香には、罪悪感を抱いている。

大陸全土で言われている「三大魔術師」の一人である。

阿良木流二刀技：対一、対多どちらでも特性を発揮することのできる剣技。

渚は42代目阿良木流師範代である。

プロローグ?!?!? (前書き)

前回プロローグとか言って、キャラ紹介しかなかったorz

ここから本編です。

ブローグ?!?

キンコンカンコン……

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

「んじゃ、ここまでな。連絡もないし、ホームルームは省略な。じゃー、気いつけて帰れよ、お前ら」

やる気を感じられない声でそう言った先生は、教室から出てった。ふう、ようやく一日が終わった。長かったぜ、まったく。

「ナギ、一緒に帰ろー」

「ああ、いいぜ」

こいつは俺の幼馴染である、神崎 静香。俺のことを「ナギ」と呼ぶ唯一の友人だ。

最近、俺に何故か絡んでくるようになったが、悪い気はしないので放っている。

この「一緒に登下校」なんていうのも、向こうから言ってきた。だから、いつも通り。

いつも通りに一緒に校門をくぐったのだった。

このあと、俺がとんでもないことに巻き込まれるとは知らずに

……

「ねえ？」

「あ？」

「ソレ何？」

静香の言う「ソレ」っていうのは、俺の持っている竹刀袋のことである。

「これか？」

「うん！！」

ま、眩しい！静香の好奇心が眩しすぎるっ！

「なになに？おしえてよー」

「ああ、もう！教えるから引っ付くな！」

俺は腕に張り付いた静香を引きはがしながら、竹刀袋の中身について考え出した。

どうやって静香に教えよう？そのまま教えたら、絶対混乱するしな……。

「ねえ？」

ああ、面倒くさいなあ。もういいや、どうにでもなれ。

「刀」

「え？カタナ？ナニソレ？オイシイノ？」

ほら、おかしくなった。

「日本刀、わかる？」

「ニホントウ？……日本刀！？」

「そ」

「なんでそんなモン持ってんのよ！？」

まあ、そうなるわな。

「いや、『親父が持って行け』って言ったから」

「和さんが？」

和さんってのは俺の親父、和成のこと。

「そ。『なんか嫌な予感がするから』って押し付けてきた」

「和さん……」

静香も呆れているようだ。

俺だって最初は嫌がったけど、親父がどうしてもって言うからな。仕方なくってやつだ。

「はあ……」

「まあ、落ち込むなって」

「落ち込んでなんかないわよ！！つか、誰のせいだと！！」

そう言って、静香が近寄ってきた時だった。

「え？」

「あ？」

突然だった。俺の足元が消えた。いや、マジで。俺の周りだけ。

「うおお！？」

「ちよっ！？」

俺は咄嗟に静香の腕を掴んでいた。

そして、俺の体は落下を始めた。

「うおおおお！？」

「いやああああ！？」

静香も当然引きずり込まれた。

そりゃそつだ。俺が腕を掴んでたんだから。

静香、すまん。

そんなことを思いながら、俺の意識は何処かへ吹きとんだのだった。

プロローグ?!? (後書き)

静香がキレイにキレイなまわってる……。
そんなキャラじゃないのにつ!

次回から異世界に飛びマース

プログラマー?!?! (前書き)

またしてもプログラマーズ

プロローグ?!?

side ユリウス

いつもの書庫に、私は今日もこもってる。

今日は、古の魔術書に載ってる召喚の魔方陣を床に描いてみた。

「こんな……感じかな？」

本の図と見比べてみるけど、間違えてなさそう。

「よしっ」

あとは、これに魔力を流し込むだけ。

でも、これはあくまで描いただけ。魔力を流す気は全くない。

「さて、消さないと危ないわ」

何かのはずみで魔力を流し込んでしまったら、洒落にならないわ。そう思って、消そうとした瞬間でした。

「よう、ユリウス!!」

「っ!?!」

突然声をかけられて、驚いてしまいました。
その拍子に魔方陣に手をつけてしまい……。

「……」

「……」

魔方陣の中には、人が二人倒れていました。

……やっちゃったよ

s i d e o u t

俺は夢を見ているらしい。しかも、過去の俺のこと。

俺は小さいころから親父や周囲の人たちに、半ば無理矢理「武道」に引きずり込まれた。

俺の友達が遊んでいる時も、手のママがつぶれてしまうほど竹刀を振り続けた。

俺の友達が親たちと旅行に行っている間も、親父にフルボッコにされて入退院を繰り返していた。

そんな俺から、「友達」と呼べる人がいなくなるのなんて、当然のことだった。

俺も自分の殻に閉じこもり、親父の言う通りに無心に竹刀を振り続けた。

俺が静香と出会ったのは、そんな時だった。

俺が小学4年の時のことだった。

その日の夜は、親父に会いに来た人がいた。俺はその人のことが前から嫌いだった。

だから、俺は一人、夜の公園で竹刀を振っていた。

一通り素振りを終わらせた時、視線を感じた。

「？」

周りに人はいなかったはずなのに、いつの間にか一人の女の子がいた。

「……なんだよ」

「赤い髪、きれいだね」

それが俺と静香の最初の会話だった。

「そんなきれいな髪、初めて見たわ！」

「……そうかよ」

はっきり言って、鬱陶しかった。

いや、静香の好奇心丸出しの目がうらやましかったんだろう。

俺にもそんな好奇心がほしい。お前みたいに、はしゃいでいたい。

そんな思いがあったんだろう。

俺は静香を放っておいて、素振りを再開させた。

「ねえ」

「……」

「どじして、こんなとこで素振りしてるの？」

「……」

「ねえ？」

「……」

それから20回ほど、一方的に話しかけてきた。

「ねえ？」

「ああ、もうーうるせえーな！」

「やっと返事してくれた」

「……」

その時俺は戸惑った。

俺が怒鳴ったのにビビらない上に、笑ってる奴なんて初めてだったから。

「ねえ？どじして？」

「……」

こじで無視したら、また今と同じになる。

「ねえ？」

「わかったよ！わかったから」

俺は竹刀をしまい、静香に向き直った。

「家に嫌な奴が来てるからだよ」

「へー、私も一緒だよ」

えへへ、って笑いながら言ってるが、正直驚いた。

こんなに明るいのに、俺にでも話しかけるような子なのに。

たぶん、これを聞いたからだろう。

俺は静香に対して、変な親近感を覚えたんだ。

何故かわからないけど。

俺達は、あの日を境に何度も会うようになった。

「渚」

「じゃあ、ナギって呼ぶね」

「好きにしる」

「私は静香だよ」

「そうか」

そして、俺は静香と話すようになってから少しずつ、本当に少しずつ昔の自分に戻って来ていた。

小学6年の時、親父に言われるまで気づかなかったが。

「最近、お前変わったよな」

「そうか？」

「ああ、昔のお前みたいだ」

「あっそ」

「お前には、悪かったと思ってる」

「何が？」

「武道を強要したことだよ」

「別に気にしじゃない」

だって、それがなかったら静香と会ってない。

「そうか」

「ああ」

それ以来、俺と静香は中学、高校と同じ学校になった。

ああ、楽しかったなあ。静香や親父、友達と遊んだ日々は。

プロローグ?!? (後書き)

はい、異世界にいたの少しだけWWW

まあ次から本格的に入っていくかな？

感想、バッチコオオオオオオイ!!

異世界！？
(前書き)

今回から、異世界に入りまーす

異世界!?

side ユリウス

目の前には、私が呼び出してしまった二人が横たわっている。

「ど、どうしよう」

まさか本当に召喚できるなんて、思ってたわ。

「おいおい、ユリウス。お前が呼び出したのかよ、この二人」

後ろから声を掛けられた。

振り返ると、オルヴァ兄さんがいた。

「……………」

そうだ、兄さんのせいで、この二人を呼び出してしまった。

そう、兄さんが悪いんだ。いっつもノックしてって言うてるのに。ノックもせずに入ってきた兄さんが悪いんだ。

「ん? どうした?」

そう思うと、なんだかムカついてきた。

「アイスバウンド」

「ぶへらっっ!」

とじつより、どつ声を掛けたらいいのか、わからない。

「……」

「……」

き、気まずいぞ。

と、とりあえずここが何処なのか聞こうではないか。

「あ、あの〜」

「……」

あつれー、おかしいなー。

「あの〜」

「……」

「……」

「……」

こつなつたら、仕方ない。

「あのっ!」

「は、はいっ!」

あ、よかった。無視されてた訳ではないようだ。

「ココはどこ?」

「こ、こ、ここはっ、ラファイエ城です……」

「あの?」

「は、は、はい? な、なんでしょ?」

なんでしょって言われても。

近くの本棚に半身隠していらっしやるのは、何故でしょう？

「ああ、いや。つーか、ラファイエ城？日本に、んなモンあったっけ？」

たしか、俺は静香と学校から帰っていたはずなんだけど……？

そっぴや、静香はどこ行った？

あたりを見回すと、俺の真後ろに倒れている静香がいた。

「静香？」

肩を揺すってみると、すぐに反応があった。

「はっ、三途の川が……」

「ダメツ！渡っちゃダメツ！それ渡ったら、死んじゃうから……！」

立ち上がってフラフラと歩き出したから、急いで止める。

「あれ？ナギ？どうしたの？っていか何処ココ？」

「一気に質問すんなよ」

それより、今はあの本棚に隠れた女の子に話を聞かなければ。

「えーと、ちよつといいか？」

「は、はい」

なんで泣きそうなんだよ。

「ここって日本？」

「に、ニホン、ですか？」

「ああ」

「に、ニホンっていうのが、な、なんなのかは、わ、わかりませんが、こ、ここは、フェルナですよ？」

フェルナ？なんだその横文字は。静香も？マークを浮かべている。

「あ、あの……」

「ん？」

突然、どもりまくりの女の子が声を掛けてきた。

「あ、あああなた達を、私のせいで、その、呼び出してしまったんです！！すみません！！」

え？呼び出した？どういうことだ？

「なあ、地図あるか？」

「えっ？」

「地図だよ、地図」

「は、はい」

そう言って、女の子は奥に小走りで消えていった。そして、一分もせず、帰ってきた。

「ど、どうぞ」

「ん、サンキュ」

どれどれ。

「……………」

やっぱり、見たこともない地図だった。

最近、友人が押し付けてきた本の内容が、ちょうど今の俺達と同じだった。

ちなみに、その本の内容は、異世界に呼び出されるって感じだった。

つまり。

今の俺たちは、この女の子に異世界とやらに呼び出されたのだろう。

「って、なに一人で納得してんだああああ！！！！」

突然、今まで固まっていた静香が怒鳴りだした。

つか、なんで俺の心が読めんだよ。

「つまりなに？ 私達はこの子に呼び出されて、異世界に来たってこと？」

「そうじゃねーの？ だって、ほら。地図が全然違うだろ」

「そうだけどっ！ どうしてナギは落ち着いてられるのよ！！？」

だって、そりゃねえ。

「面白そうだからだな」

「はあ！？」

「まあ、落ち着けつて。落ち着かないと、碌なことにならないぞ？」

「だーかーらー！ 落ち着こうにも落ち着けないっての！」

はあ、もう放っておこう。

「でだな」

「ちよつと！？無視すんの！？」

「他にも幾つか聞きたいんだが？」

「ムキーツー！！」

しばらくして、静香は暴れ疲れたのか、今は落ち着いている。
その間に女の子に聞いてわかったことが幾つか。

この子の名前は「ユリウス・ラファイエ」であるとか。

フェルナっていうのは大陸の名前で、ここの地域は「ラファイエ」
っていうとか。

この書庫があるのは「ラファイエ城」で、ユリウスはラファイエ城
の王の娘であるとか。

後ろのほうで気絶しているのは、ユリウスの兄「オルヴァ・ラファ
イエ」であるとか。

ユリウスはいつもここで魔法の練習をしていて、その一環で俺達を
召喚してしまったとか。

あと、俺がユリウスと話していて感じたことは、ユリウスが極度な
人見知りであること。

まあ、今では最初のように隠れることはなくなったが、まだ多少ど
もっている。

「はあ、はあ、疲れたわ」

「お疲れさん」

「まったく、ナギはお気楽すぎ」

「褒めんなよ」

「褒めてないよ!?!」

さて、静香も復活したことだし、これからどうするか決めないとな。

「ねえ、私達つて元の世界に戻れるの?」

「そ、それは……」

「今のままではわからないってよ」

「えっ?」

そう、帰り方がわからないのだ。

あるにはあるんだろうが、なんせ、俺達を呼び出した魔法自体がかなり昔のものらしい。

「てことは、帰れないの?」

「いや、今はわからないってだけで、帰る方法がない訳ではないらしいぞ」

「そ、そうなんだ」

静香はホッとした表情になった時だった。

「おおっ！なんて美しい黒髪だ！」

声が出た方を見ると、オルヴァさんが立っていた。

「そのあなた、私の妻にならないか？」

「え！？私！？」

いや、お前しかいないだろ。

「つか、いきなり「妻にならないか？」っておかしいだろ。」

「そう、あなただっ！お名前は？」

「し、静香です。神崎静香」

一気に静香に詰め寄り、名前を聞くオルヴァさんに、若干気圧されている静香。

「静香さん！！私の妻に「おい」……なんだ、貴様？」

俺は静香に「助けて」と目で訴えられたので、割って入ったんだが……。
何この違い？いや、仕方ないと思うけどさ？これはひどくないか？

「いや、静香が嫌がってんだろ」

「何を言うか！！静香さんが嫌がるわけないだろう！！」

うお、こいつナルシストかよ！めんどくせえ！

「いやいや、静香をちゃんと見ろよ」

「見なくてもわかる！嬉しさのあまり泣いているのだろう？」

ちげーよっ！！！！

ああ、こりゃこのままだと平行線のまま、時間が過ぎていくな。

「だからさ……」

「貴様、それ以上邪魔をするというなら、我が剣の錆にしてくれるぞ？」

「ああ？」

なーんか、カチーンと来たな、今のは。

「できるもんならやってみるよ」

「ほお、この俺にそんな大口叩くとはな」

あ、やば、なんかトラブル臭がプンプンして来た。

「いいだろう、ならば、静香さんを賭けて、決闘だ!!」

ああ、俺の予感が見事的中。

決闘とかめんどくせえええ!!

異世界！？（後書き）

はい、今回はちょっと長めだったかな？

次回に向けて戦闘フラグ、ピンピンに立ててやったぜ！（、、）
ヒャッハー

感想などありましたら、バッチコオオオイ！！

決闘！？（前書き）

さー、表現が難しい戦闘シーンの始まりだー（ノ、）タハー

あ、ちなみにオルヴァの設定

歳は28歳で、身長は176

風貌はF〇のクラ〇ドみたいな感じ（金髪）

戦闘スタイルはパワーで圧倒する感じ。武器はクレイモア。

ではでは、決闘のはじまりはじまりー

決闘！？

数分前、俺はオルヴァさん（年上）から決闘を申し込まれてしまった。

現在、場所は書庫から城の広場へ移動した。

いつの間にか、城の兵であろう人達が集まって来ていた。

「ナギー！負けるなよー！」

「ど、どちらも頑張ってください」

観客にまじって静香とユリウスが声援を送って来ている。

俺の目の前には、クレイモアっていう（さっきユリウスに教えてもらった）武器を振っているオルヴァさんがいる。

「はぁ……」

めんどくさい。オルヴァさんはやる気満々。俺やる気無し。何この差。

「お互い、準備はいいですか？」

いつの間にか審判まで出てきてる。

「あぁ」

「……いいですよ」

まぁ、仕方ない。こうなったからにはやるしかないっしょ。

「では、お互い名を名乗ってください」

「オルヴァ・ラファイエ」

「……阿良木渚」

お互いに名乗った途端、観客達の声援が無くなった。どうやら、決闘中は皆、黙るようだ。

ちょうどいい。いざという時、集中しやすい。

「それでは、始めっ！」

審判の合図と共にオルヴァさんは、踏み込み横薙ぎに一閃。俺はギリギリで躲す。

「っ、危ないっすねえ！」

「ほお、今のを避けるか」

ちなみに、俺の腰には二本の刀がある。

まったく、親父には感謝しとかないといけなげ。

「しかし、抜かないのか？」

「別に抜刀してもいいけど？」

「ならば、抜き構えろ。丸腰の相手を斬るのは、我が流儀に反する」
「俺が必要だと感じれば、抜刀してやりますよ」

かるーく挑発してみたんだが、面白いほどオルヴァさんの顔は真っ赤になっていくのが分かる。

「おもしろい。ならば、貴様が剣を抜く前に、その命刈り取るうではないか！」

そう言つて、袈裟に斬りかかつて来た。

少しだけ体をずらし、その軌道から体をそらす。

んー、悪くはないんだけど、親父の拳の方が数倍も怖いな。

そんなこんなで、十数回目のオルヴァさんの攻撃を避けた。

「くっ！逃げてばかりか!？」

なんとも言え。今はクレイモアの範囲を把握してる最中なんだよ。なんとなく分かってきたが、オルヴァさんの剣技って単純すぎる。

「はあっ!?!」

再び横薙ぎ一閃。これで五回目だ。しかも同じタイミング。

「ちいっ!?!いつまで、躲し続けるつもりだ!？」

そろそろいいかな、とどめさしても？

「ああ、もう終わるから」

「は？」

俺の発した言葉が予想外だったんだろう。まあ、そんなこと関係ないんだけどな!

「阿良木流 残雪」

「え?あ?」

オルヴァさんから見れば、俺が突然消えたように見えたことだろう。今、俺はオルヴァさんの後ろに立っている。刀をオルヴァさんの首に添えて。

「な、何が起きた……?」

「それより、どうします？負けを認めますか？」

「……俺の負けだ」

俺はその言葉を聞いて、納刀した。

その瞬間、観客達から声が上がった。

すげえ！あの、オルヴァさんに勝ちやがった！！

誰だか知らんがすげーぞ！！

「ナギー、アンタ、手、抜いたでしょ！？」

野次が混じってたが気にしない。

「強いな。阿良木殿と呼んでも？」

突然態度が変わったオルヴァさん。はっきり言って怖い。

「やめてくださいよ。渚でいいです」

「そうか。では、渚殿。少々頼みたいことがあるんだが」

あ、やべ、またトラブル臭が……。

「な、なんですか？」

決闘！？（後書き）

はい、戦闘シーン、ムズイヨー orz

とりあえず、技説明

阿良木流 残雪

高速で相手の後ろに回り込む

基本的に他の技と組み合わせる

この技は結構使うことになるかもネー

次回、ようやく旅をすることになる理由です。

今の予定だと「こんな理由かよっ！！」みたいな内容です

お楽しみに〜

頼み事！？

「頼みがある。ついて来てくれ」

オルヴァさんにこう言われ、着いた先は「謁見の間」というやつらしい。

今そこにいるのは、俺と静香、オルヴァさんにユリウス。そして、王がデカい椅子に座っている。

「で、頼みたい事ってなんですか？」

早速、話を切り出した。

「うむ、頼み事っていうのはな、ユリウスの旅に同行してほしいってことだ」

「旅？」

ユリウスの方を見ると、ユリウスも驚いた顔をしている。

「に、兄さん！」

「これは、以前から父に頼まれていた事だ」

「お父様、本当ですか？」

「そうだ、私がオルヴァに頼んで、ユリウスの旅の同行者を探してもらっていた」

なんだか、ユリウスも混乱しているような感じだな。

もちろん静香も混乱しているようだ。

「でもっ、この人達に迷惑だよ!!」

「まあ、召喚された時点で、かなりの迷惑だったんだがな」

「っ!!」

そこで俺が口を挟むと、ユリウスはすまなさそうに顔を伏せた。

「まあ、気にしちゃいない。異世界に来るなんて、そうそう体験できねーしな? 静香」

「へっ!!? あ、うんうん、そうだよね!?? って何言ってるん私イイイイイ!!!!??」

「まあ、静香は放っておいて」

「放っておかないでよ!!」

「ユリウスの旅つてのは、なんなんですか?」

それが、一番気になる。

「ああ、それは私が説明しよう」

王が話し始めた。

しばらくして、王が話し終えた。
王の話を要約すると、こんな感じらしい。

彼ら、ラファイエ家には昔からのしきたりがある。

そのしきたりは『16歳になったら旅にでる』というものらしい。
男女がかかわらず。

そして、その旅の同行者は家族の者から出してはいけない。あくまで他人でなければいけない。

今まで同行者を集めなかった者はいなかった。

やり方もそれぞれ。

町で声を掛けたり、ギルドでメンバーを組んだり、決闘で打ち負かせて等々。

そして、魔術で呼び出すこともあったらしい。

「まあ、見ての通りユリウスは人見知りだ。だから私はオルヴァに同行者を探してもらっていたんだが、すでにユリウスが召喚していたとはな」

「で、俺達に同行者としてユリウスを助けてほしい、と」

「ああ、そういうことだ。どうだ？受けてくれるか？」

いやまあ、受けないと元の世界に帰ることもできない。

それに、下手したらこっちの世界で餓死なんてこともあるかもしれない。

「ちょっと、どうするの？」

静香は小声で話しかけてきた。

「どうするつつつても、受けるしかないだろ」

「どうして？」

「今は、元の世界に帰れる可能性がある方に、賭けるしかないだろ」

「あ、なるほど」

「わかったのか？今ので」

「何？馬鹿にしてんの？」

「いやいや」

静香も了解したようだし、受けてやろうじゃないか。

「わかりました、同行しますよ」

「え！？」

ユリウスが驚きの声を上げている。

「そうか！それは助かる！」

オルヴァさんは喜んでいし、王も満足げに頷いている。

「し、静香さんは、いいんですか？」

「まあ、ユリウスちゃんの事情を知ったら、誰でも放っておけないと思うよっ。」

「い、いいんですか？」

「ああ、俺は構わない」

「私も」

そこまで言うと、ユリウスも安堵と困惑を混ぜ合わせた表情をしたまま、黙ってしまった。

「それでは早速なんだが、その服を着替えたらどうだ？」

王に言われて初めて気づいたが、俺達は制服のままだった。

このままでは、こちらの世界では目立つだろう。

「オルヴァ、ユリウス。二人の服を見繕ってやれ。私は国政の方に戻る」

「わかった」

「……はい」

そして、俺はオルヴァさん、静香はユリウスに連れられて、謁見の間を後にしたのだった。

頼み事！？（後書き）

ああ、やってしまった。

旅をしなければならぬしきたりってなんだよw

まあ、次回の最後には出発したいとおもいます

感想、バツチコオオオイ！！

旅立ち！？（前書き）

ようやく、旅立ちます

旅立ち!?

俺とオルヴァさんが決闘してから、もう五日経った。
この五日間でいろいろな事あった。

あった事その一。

俺と静香はそれぞれ、見繕ってもらった服に着替えた。

俺は、黒の袖なしのタートルネックに、黒のジーンズに似たような物。

そして、腰の後ろに二本の刀をクロスさせ、手には指ぬきグローブをしている。

静香は、フード部分が緑でクリーム色の半袖パーカー、藍色のショートパンツ。
肘までの鉄のガンガレット、腰には矢筒と折りたたまれた弓が装備されている。

お互いブーツを履いている、という点だけ一緒だった。

「「変な恰好」」

お互いの服装を見て、最初に言った言葉だった。

あつた事その二。

俺はオルヴァさんによく試合を申し込まれた。

「はあっ!!!」

オルヴァさんの体重の乗った一撃が、袈裟斬りの軌道で迫ってくる。

「阿良木流二刀技 六幻」

ガキイイイン!!

「うわっ!!」

「勝負ありですね」

オルヴァさんは、武器を取り落している。

「くっ、やはり強いな。今の、どうなったんだ?」

「クレイモアに、六撃いれただけです」

「一撃も見えなかつたんだが」

俺は、クレイモアを拾い上げ、オルヴァさんに手渡した。

「まあ、見えないようにしてるんですけどね」

「むう……」

俺達は気が付くと、結構仲良くなっていたのだった。

あつた事その三。

書庫で静香はユリウスに、魔術について教えてもらっている。俺はその間、書庫の本を適当に読んでいる。

「ねえ、私でも魔術って使えるのかな？」

「簡単な魔術なら、おそらく」

「なら、おしえて！一度使ってみたかったんだ！」

「では、まずこれを」

向こうは楽しそうだな。女の子同士だからかな？

「ん？」

俺が手にした本は、どうやら魔術の本だったらしい。中を見てみると、図がいくつも描いてあった。

「へー、召喚の魔方陣ね」

ちよつとおもしろそうだな。

俺は近くに転がっていたチヨークらしき物で、床に描いていった。

「おりゃ
」

魔方陣に手を触れてみた。

ピカッ！！

「
……」

魔方陣の中心にいたのは、チワワぐらいの大きさのオオカミがいた。そのオオカミは俺に擦り寄ってきた。

「がっっ！！」

「
……」

ものっすごく懐かれているんだが。

「よしよし」

「
〜」

めっちゃ心地良さそうだし。

「渚さん？なんだか、こっちから光が……」

「ん？」

「ユリウスーどうし……」

二人が俺が抱いているオオカミを見て、固まっている。

「どうしたんだ？二人とも」

「か、可愛い……」

「うおっ！？」

「がっつ！?」

静香が俺の腕からオオカミを取り上げ、抱きしめだした。

「可愛いよおおお！」

「きゅ〜」

オオカミが死にかけている！

「お、おい!?死にかけてるぞ!?!」

「え?ああああ!!ごめんね!」

「がっつう……」

はあ、助かったな、オオカミよ。

そういう目を向けると、オオカミが頷いたように見えた。

「あの、渚さん?」

「ん?」

ユリウスが、俺が今まで手にしていた本を見て、俺に話しかけてきた。

「あの、まさかこれをやったんですか?」

「ああ、その魔方陣だ」

「ということは、その子は渚さんが呼び出したんですか!?!」

「ああ」

ユリウスは、信じられないものを見るような目で、俺を見ている。

「この子って、魔界の狼『フェンリル』ですよ!?!それを簡単に呼

び出すなんて」

「いや、その本の通りにしただけで」

「それでもすごいですよ!」

なんだか照れる。

「がうつ!」

「あー、よしよし」

「とつても、懐いてますね」

「よく分からんが、最初つからこんなだよ」

「私にもよく分かりませんね……」

「まあ、俺と静香はイレギュラーな存在だし」

「そうなんですかね?」

「それぐらいしか、理由が分からん」

「それもそうですねえ」

そして、旅の同行者に、フェンリルこと、フェン（命名 静香）が
加わった。

そして、六日目の朝。

俺達三人とフェンは城門にいた。

見送りにはオルヴァさんだけが来ていた。

本当は見送りは禁止されているらしいんだが、内緒で見送りに来て
いるらしい。

「気をつけて行って来いよ」

「はい」

「じゃあ、ユリウスを頼みます」

「ああ」

「分かりました」

「がっつー!!」

「では、行ってきます。兄さん」

「ああ」

そして俺達は城門の外へ踏み出したのだった。

旅立ち！？（後書き）

ようやく、ようやく旅立ちましたよ。

フェンは、思いつきで追加したキャラです。

後々、どういう働きをしてくれるか楽しみです。

あと、ユリウスの服装は白のワンピースに杖って感じですよ。

っーか、オルヴァさんがいい人になりすぎてしまった……

それでは、感想バツチコオオオオイ！！

ギルド！？（前書き）

今回、ギルドに行きまーす

ギルド!?

俺達はまず、城下町のギルドへ向かうことにした。

「へー、これがギルドねえ」

「おつきいわね」

「それは、ラファイエが栄えている証拠だそうですね」

ユリウス曰く、ギルドが大きければ大きいほど、そこが栄えているのだそうだ。

「まあ、何はともあれ、入ろうぜ」

「そうですね」

「そうね」

「がっつ!」

俺達は、こうしてギルドに入ってしまった。

「初めてのお方ばかりですね？」

「ああ、そうだな」

「では、こちらに記入をしてください」

「わかった」

そうして受付で俺達は登録をし終えた。

「ギルドの説明をしようと思うのですが、よろしいですか？」

「そうだな、お願いしようか」

「はい、わかりました」

そう言っ て受付の男性は、見本のギルドカードを出してきた。

「まず、依頼を受ける時に関する注意事項です。

ここに書かれているのが、あなた達のランクです。

上から順に、S、A、B、C、D、E、Fとなっています。

そして、依頼の方にも同じランク付けがされています。」

そこまで言っ と、男性は依頼の見本を出してきた。

「ここに書いてあるのが、依頼の方のランクです。

ランクが上がるほど、危険度が上がっていきます。

なので、依頼を受ける時は気を付けてください」

「なあ、自分のランクより上の依頼っ て受けれるのか？」

「原則、そういう規則はありません。が、特定の依頼にはそういう規則が設けられます」

「特定の？」

「はい。例えば、依頼主が受ける側のランクの規定を設けるっていったことがありますね」

「なるほど」

「では、依頼をする時に關しての説明ですが、いりますか？」

「いや、今の時点ではそういうことはないから、いいや」

「では、質問などは？」

「そうだな、なんかあるか？」

後ろで静かにしていた二人に聞いてみる。

「無いかな」

「無いですね」

「だそうだ」

「わかりました。」

では、こちらがギルドカードとなります。

最初はFランクからのスタートとなります。

紛失等した場合には、お近くのギルドで再発行できますので

「ああ、わかった。説明ありがとうございます」

「いえ、これが仕事ですから」

そう言っつて、男性は爽やかスマイルを浮かべた。

さすがと言っつべきか。

「それでは、あちらで依頼を受けれるので」

「ああ、わかった。じゃ、行くぞ」

そうして、俺達はギルドの登録を終えたのだった。

「最初はこれでいいんじゃないか？」

そう言つて、俺が指差したのはラファイエからマスヴィアへ出る荷馬車を護衛する依頼だ。ランクもEランクである。

「そうですね。移動も兼ねれますし」

「そうね。しかも、道中の治安はいい方らしいし」

「じゃ、早速受けよう」

俺達は依頼書を、さっきの男性の所に持って行った

「出発は今日の昼です」

「了解」

そうして、依頼を受けたのだった。

そして、昼。城下町の広場。

「アンタらが、今回の護衛者か」

「ああ」

「じゃあ、早速出発する。こっちに乗ってきてくれ」

「分かった」

そして、俺達はラファイエを後にしたのだった。

襲撃！？

その襲撃は、ラファイエを出てから、ちょうど三日目の昼だった。

「ああ、暇だなー」

「そうですねえ」

「ナギー、なんかしてよ」

「なんかってなんだよ」

「一発芸とか」

「ふざけんな、お前がやってろ」

「なにおう！」

「ああん？」

「すみません、ごめんなさい」

「分かればいい」

「フフツ」

平和な俺達だった。フェンは寝てるし。

その時だった。

「おい、アンタら！！」

「どうした？」

「さ、山賊が出たんだ！！！！」

「な！？山賊！？」

俺達は荷馬車から飛び出し、周囲を見渡した。

「あれか……」

確かに、前方に山賊らしき奴らが、20人程いる。
俺は、静香とユリウスを呼んだ。

「ユリウス、静香」

「は、はい？」

「な、なに？」

「あそこにいる奴ら以外に、いるかもしれない」

「えっ!？」

「マジ？」

「いるかもしれない、だ。ユリウスと静香、フェンは、荷馬車を守つてくれ」

「ナギはどうするの？」

「俺は前にいる奴らを片付ける」

そう言つて、俺は依頼主の隣に立った。

「俺があいつ等を片付けるので、あなたは荷馬車の方に」

「わ、わかった」

これで、準備はできた。

「おい、お前ら!!その荷馬車をおいていきな!!」

「痛い目見る前にそうした方がいいぜ？」

「っーか、ビビって話せんじゃないの!?!?ヒヤハハハハハ!!」

なんか、喚いているが気にはしない。

「おい!聞いてんのか!?!」

「なあ、おとなしく引いてくれないか？」

「はあ！？何言っちゃってんの！？んなわけないじゃん！？」

狂ってやがるなあ。

「はあ、仕方ないか」

俺は刀を二本とも抜いた。

「おうおうおう！？やる気が、コラ！？」

「この人数相手に勝てると思ってるのか！？ああ！？」

「おら、かかってこいよ！！殺してやんよ！！」

はあ、メンドクセー。

「言われなくても、わかってるよ！」

言い切ると同時に、俺は突っ込んで行った。

side ユリウス

あちらの方で、渚さんが前に出てきていた山賊Aに突撃しました。

「ヒャツハハハハハハハ！！自殺行為だっつもの！！」

「うるせえぞ！！阿良木流二刀技 羅刹！！」

そう聞こえた瞬間、山賊Aは地面に倒れていました。

「眠っつけ」

「げふっ！？」

どうやら、殺したわけではなさそうです。

「お、おい！お前ら、やつちまえ！！」
『お、おう！！』

それを皮切りに、残りの山賊達が渚さんに群がっていきました。

「めんどくせえんだよ！！阿良木流二刀技 神楽！！」

まるで、何かの舞を見てるかのような感じでした。

気が付くと、ボスらしき人を残して、それ以外は地にひれ伏しています。

「一瞬で片付くとは、面白くもないな」
「ひい！！」

ボスらしき人は、怯えて尻餅をついているように見えます。

「お前も眠ったときな」
「た、助け、ぐふっ！」

どぞっ

そうして、山賊の鎮圧を終えたのでした。

side out

「ふう」

他愛もない。伏兵もいなかったようで、荷馬車の方も安全だった。

「お疲れさま」

「お疲れ様です」

「いや、それほど疲れなかった」

「さすがです！」

「まあ、ナギだからね」

そんな感じで、他愛もない話をしていると、依頼人のオツチャンが話しかけてきた。

「すまないな。こりゃ、Dランクの仕事だったな。あとで、お詫びをさせてくれ」

俺達は遠慮したのだが、どうしてもと言うオツチャンに押し切られた形で、お詫びを受け取ることにしたのだった。

そして、ラファイエを出てから七日目の昼。マスヴィアの広場に着いた。

「ようやく着いたな」

「そ、そうね。お尻が痛いわ……」

「そ、そうですね……」

俺達はオツチャンから元の依頼達成金である、銅貨五十枚に上乗せで三十枚もらったのだった。

ちなみに、こちらの世界の金は銅貨五百枚で銀貨一枚、銀貨五百枚で金貨一枚、金貨五百枚で白金貨一枚となる。

白金貨は一枚で一生遊んで暮らせるくらいの価値があるそうだ。

「とりあえず、宿を探そう」

「そうですね」

「もう、疲れたあー」

「おら、自分で歩け。静香」

「フエンちゃん、乗せてえ」

「がう」

「無理に決まっただらうが!」

なんだかんだ言いながら自分で歩く静香。
歩くなら文句を言わないで欲しい。

そして俺達は手頃な宿屋に泊ることにし、その日はゆっくりと休むことにしたのだった。

襲撃！？（後書き）

今回出た渚の技説明です

羅刹

一瞬で何度も刀を振るう技。
六幻の強化版。

神楽

自身の体を軸として、回転しながら斬りつける。
って感じですよ。

次の次ぐくらいまでには、新キャラを追加したいなあ、と思っていきます。

それでは、感想バツチコオオオイイイ！！

新メンバー加入！？（前書き）

題名の通り、新キャラを登場させます

新メンバー加入！？

俺達がマスヴィアに着いてから、すでに二週間が経っていた。

俺達の日課は、朝にギルドで依頼を幾つも受け、夕方には全ての依頼を達成。金を受け取る。

そういつたサイクルを続け、金は銀貨二枚、銅貨百枚つといった具合にたまってきた。

そして、ある日の朝。宿の食堂に、俺と静香はいた。

「さて、今日も依頼をこなしますかね」

「そうね。でも、そろそろ次の町に行きたいわ」

「まあ、それもいつにするか考えておこう」

「あれ、ユリウスちゃんは？」

「フェンと出かけてる」

「あれ？ そうなの？」

なんでも、散歩を兼ねてたそうだ。

「そろそろ、帰ってくると思うが」

「あ、ホントだ。噂をすれば、なんとやら」

食堂に入ってくるユリウスが見えた。

俺は手を挙げ、こっちだと合図した。

それに気づいたユリウスは、小走りでこっちに来た。

「おかえり。どうだった？」

「フェンちゃんがあちこち行ったから、少し疲れました」
「がうつー!!」

フェンは気のせいかつやつやして見える。

「よかったな、フェン」

「がうつー!!」

俺が撫でてやると、気持ちよさそうにしている。

「ほつんと、フェンちゃんってナギに懐いているよね」

「そうですねえ」

「ほれ、飯だ」

「がうつー!!」

「ナギもフェンちゃんの事、気に入っているみたいだし」

「私達にはあそこまで懐いてくれませんし」

そんな、平和なやり取りをしている時だった。

「あの、すみません」
「ん？」

突然見知らぬ少年に声を掛けられた。

「あなた達って、ここ最近で結構な数の依頼をこなした人達ですよ

ね？」

「あんたが思っている奴等かどうかわからんが、確かに依頼は数こなしてきたな」

そう言うと少年は満面の笑みを浮かべた。

「よかった！！間違いなさそうです」

「で、なんで声を掛けてきたんだ？」

「それはですね、僕をあなた達の仲間にして欲しいんです！！」

「はあ？」

そんなことを言われるとは、まったく思っていなかった。

「ちゃんとした理由があつてですね」

「なんだそれは？」

「僕はこの街の生まれの者でして、まだ他の街には行ったことがないんです」

そこで、一つ呼吸をした少年は、再び語りだした。

「それで、今年で十五になったので、これを機にこの街から離れようと思っんです」

「それで？」

「思っただんですが、その、一人だと心細くて」

「で、旅と一緒に行くメンバーを探していたと」

「はい。それで、ギルドに行っただんです。そこで噂されていたのが、あなた達だったんです」

「それで、俺達を探していたと」

「はい」

なるほどなあ。

そこで、静香が口を挟んだ。

「でも、どうして私達ってわかったの？」

「えっと、それはですね。」

ギルドで『赤髪の男と美少女二人に小さな白銀の狼』っていうと噂されていたので

「び、美少女だなんて……」

静香は何故か照れている。

「で、ユリウスとフェンがここに加わったから、声を掛けてみた、と」

「はい」

なるほど。さっきから感じていた視線ってのは、こいつだったのか。

「まあ、理由は分かった」

「それじゃあ……」

「あー、待て待て。俺がリーダーじゃない。リーダーはこっちだ」

そう言っつて、ユリウスを引っ張り出した。

「えっ！？な、渚さん、何を！？」

「お前がリーダーなんだ。決めてやれ」

「ええっ！？」

「お願いします……！」

「え、えーっと、その……」

やっぱり、ユリウスはまだ俺達以外の人と喋るのは苦手のような。

まあ、これも訓練だと思って、がんばれ、ユリウス。

「い、いいんですか？私達で？」

「あなた達がいいんです！！」

「えっと、なら、いいですよ。だ、大歓迎です、よ？」

ユリウスがそう言うと、少年は満面の笑みで、ユリウスの手を握った。

「ふえっ！？」

「ありがとうございます！！」

「い、いえ……」

「それで、少年？名前は？」

「はっ！！そうでした、僕はクロノ・ノワールです！！」

「クロノね。俺は阿良木渚。渚でいいぜ。で、こっちがフェンナ」

「がっっ！！」

「私は神崎静香よ。静香でいいわ」

「わ、私は、ユリウス・ラファイエです。ゆ、ユリウスでいいです

よ」

「よろしくお願いします！！」

こうして、新たなメンバーが加入したのだった。

新メンバー加入！？（後書き）

さあ、新メンバーの設定を書きますよ

クロノ・ノワール

年齢 / 15

性別 /

身長 / 172

特徴 / 青髪「短髪」

服装 / 某ネットゲのラ○ジエと同じ

戦闘スタイル / 二丁拳銃「SIG SAUER P226」

マグナム「COLT PYTHON 357 MA

GNUM」

スナイパーライフル「Snayperskaya

Vintovka Dragunova」

銃撃戦を得意とし、さらに近接では体術と二丁のP226を用いて戦う。

一人称は「僕」であり、誰にでも非常に腰が低い。

実力は非常に高いが、自信を持っていない。

ユリウスが少し気になっている。が、なかなか話しかけれない。

静香曰く「ユリウスに次ぐ、イジリがいのある少年」だそうだ。

普段は腰にP226を、後ろ側にCOLTさし、Dragunov aを背中に斜め掛けしている。

って感じですよ。

うーん銃が多いなw

さて、感想バツチコオオオイイイ!!

次の街へ出発！？（前書き）

新メンバーも加わったことだし、次の街へ移動をしたいと思います

次の街へ出発!?

クロノが加わった日、俺達はギルドで移動を兼ねた依頼を受けることにした。

「クロノ、お前のランクは？」

「Eランクです」

「へー、思ったより高いんだな。俺達と一緒にじゃん」

「そ、そうですかね？」

クロノは、はにかんでいる。

「クロノ君、可愛いー!」

「うええ!?!」

静香の悪い癖が発動。

「静香」

「うっ、ごめん」

「分かればいい」

「渚さん、これなんてどうでしょう?」

静香を止めていた間に、ユリウスが見繕ってきてくれた。

「どれどれ……」

アベリアへの荷馬車の護衛。ランクはEランク。報酬金もそこそこ。

「うん、これにしよう」

「そうですね。僕もこれがいいと」

「私もオツケーだよ」

「がうっ」

満場一致だった。

そして、俺達は依頼主と共にマスヴィアを後にするのだった。

出発してから、一週間。

「なあ、クロノ」

「なんですか？」

「お前が持つてる武器、ちょっと見せてくれるか？」

「いいですけど、そんな面白いものじゃないですよ？」

そう言って、SIG SAUER P226、COLT PYTHON
ON 357 MAGNUM、Dragunovaを渡してくれた。

「SIG SAUER P226にCOLT PYTHON 37
5 MAGNUM、Dragunovaか」

「わかるんですか!？」

「ああ、まあな」

元の世界の友人にガンマニアがいて、結構語られたんで少しは分かる。

「しかし、こっちにもあるとはな」

「？」

「ああ、気にすんな。ありがとよ」

「あ、いえ」

クロノは銃を素早くしまっていた。

「慣れてんのな」

「子供の頃から、ずっと触ってましたから」

「ほー、俺みたいだな」

「渚みたい、ですか？」

「ああ、俺も小さい頃から、ずっと武器を握り続けてきたからな」

「へえ、なんだか渚とは話が合いそうです」

「俺もそう思うぜ」

いつの間にか、俺達は親友となっていた。

そして、八日目の夕方だった。

「ま、魔物が!!」

依頼人がそう叫んだのが聞こえた。

「魔物!？」

以前、ラファイエを出る前に、魔物についてオルヴァさんから聞いていた。

魔物とは、古代からいる負の魔力を取り込んだ動物をまとめて言っているそうだ。

大昔に一度、魔物が大繁殖し、人間が絶滅しかけたとか。

しかし、それ以来なりを潜めていた魔物たちが最近になって、再び活動し出した。

それを多くの人は、以前の大惨事が再び起こるのではないかと、考えているらしい。

しかし、クロノ以外の俺達は初めて魔物を見る。

その魔物は群れを成して、空を飛んでいた。

「な、なにあれ!？」

「す、すごい数です……」

「空にいる相手には、手がだせねえ」

くそ、どうする!？」

「僕に任せてください!！」

「クロノ……。そうか、お前なら!！」

クロノは背中からDragunovaを取り出し構えた。

side クロノ

空にいる魔物達には、渚も手を出せない。
ここで役に立つのは、渚以外のメンバーだ。
でも、僕以外の二人は固まっている。

「僕に任せてください!!」

「クロノ……。そうか、お前なら!!」

僕は背中からDragunovaを取り出し構えた。

『狙いを定めるんだ。一撃で相手を打ち抜く、その意気だな』

今は亡き父親の言葉が、一瞬脳裏を過ぎる。

「一撃で相手を……。打ち抜く!!」

ドオンッ!!

「グギヤアアアア!!」

先頭の一体を撃ち落とした。

「次っ!!」

照準を次の一頭に向け、再び発射。
そうしていると、固まっていた二人が動き出した。

「クロノさんにだけ、やらせているわけにはいきませんっ!!」

「そつよね、やっと私の出番ね!!」

ユリウスさんは杖を構え、静香さんは弓を取り出した。

s i d e
o u t

ユリウス、静香が加わってからは、本当に早かった。
俺がすることといたら、落ちてきた魔物で死んでない奴に止めを
さすことだった。

そして、相手を全滅し終えた時だった。

「はあ、はあ」

静香がその場に座り込んで、息を整えようとしていた。

「大丈夫か？」

「あ、ナギ……。ごめん、生き物を殺したのって初めてだから……」
「お前がやらなきゃ、やられていただけだ。生き残るために、相手を殺す。」

これ、この世界の掟。ってな

「でも……」

「殺した相手の分まで、お前が生き延びる。そうすれば、供養にもなんじゃねえのか？」

「そう、かもね……。でも、少し気持ちの整理をさせて……」

「ああ」

そして、静香はアベリアに着くまで、ずっと俯いていたのだった。

マスヴィアを出て一ヶ月、ようやくアベリアに着いたのだった。

「ようやく着きましたね……。僕、お尻が痛くなっちゃいましたよ」
「私もです……。慣れないといけないんですが……」
「ふぁーあ、眠いわ」
「静香」
「？」

俺は手招きをして、ユリウス達から少し離れた。

「なに？」
「大丈夫か？」
「お尻は痛いよ？」
「ちげーよ！」
「じゃあ、あの事、だよな？」
「ああ」
「うん。完全に、じゃないけど、私なりに割り切れるようにしたから」
「そうか、安心した」
「なに？心配してくれてたんだ？うーれしーなあ」
「バツカかお前？これから、いざという時に使えねえんじゃ、困るなあって思ってただけだよ」

「なにそれ！？ヒドイ！？」

「ったく。……心配して損したぜ」

「なんか言った？」

「なんでもねえよ！！」

俺はしばらく不機嫌だった。

俺達は依頼人から報酬金である、銅貨百五十枚を受け取り、手頃な宿を見つけたのだった。

次の街へ出発！？（後書き）

ふう、何とか静香の初めての殺生のシーンが書けた。
たぶんおもしろいかも。

さて、感想バツチオオオオイイイイ！！

閑話休題！？（前書き）

ちっと、横道にそれます

閑話休題！？

閑話休題その一

渚・クロノ

今、渚とクロノの二人は森の中にいる。

「なあ、クロノ」

「ん？」

「なんで俺達二人なんだ？」

「なんでって言われても、依頼途中ではぐれちゃったんだから、仕方ないよ」

「そうだけどさあ」

「どうしたの？僕じゃなくて、静香さんがよかつたの？」

「いやいや、何言ってるの。んなわけないじゃん」

「とか言いながら、少し赤くなってるよ」

「んなわけない」

「さすがに引つかからないか」

「てめっ、かまけやがったな！！」

「でも凶星ではあつたんじゃない？」

「まあ、そうだな」

「意外と素直だね」

「そうか？ただ、あいつの方が付き合い長いからな。いじりやすい」

「いじりやすいって。てか、渚って静香さんの事、好きなの？」

「好き？なんでそうなるんだ？」

「お、おう。予想外の反応」

「意味が分からん」

「ま、いいんだけどね」

「お前はどつなんだよ？」

「へっ!？」
「好きな奴、いんのかよ？」
「い、いや? いないよ?」
「ずばり、ユリウスだろ」
「ええ!?! なんで分かるのさ!?!」
「いや、適当に……」
「うわ、墓穴掘った」
「へー、ユリウスの事がねえ」
「な、何さ? その笑みは?」
「ま、頑張れや。あいつは手強いぞ?」
「え? どういう意味?」
「まあ、いつか分かるさ」
「ちよ、教えてよ!?!」
「ハハハハ」

はぐれたというのに、二人の会話は平和そのものだった。

閑話休題その二
ユリウス・静香・クロノ

すでに夜になったが、宿には渚とフェンはおらず、食堂で三人は夕食をとっていた。

「クロノ君、ナギは？」

「気が付いたらいなくなっていたんで、何してるのか分からないです
すね」

「フェンちゃんもいないし。もしかして、散歩かな？」

「うーん、散歩ならもう帰って来てるはずだろうし」

「うーん」

「あの」

「ん？なにになに？」

「渚さんなら、フェンちゃんに引っ張られて行ってましたよ」

「え？フェンに？」

「フェンちゃん、見かけによらず力強いのね」

「てか、フェンってどんだけ渚に懐いてんだろ？」

「そうよねえ」

「私達にも、少しは懐いてほしいです……」

「……はあ」「」「」

三人そろって、ため息をつくのだった。

そして、フェン達は日の出と共に帰って来たのだった。

閑話休題その三

渚・静香

渚と静香は、久しぶりに二人きりで朝から街を回っていたのだった。

「なんか、久しぶりだよな。こうやって二人だけで歩くのって」

「そうだな」

「そうだなって、反応薄いなあ」

「なんだ？文句あんのか？」

「いえ、まったく、微塵もございません」

「そうか、ならいいんだ」

「……もう」

「なんか言った？」

「いや、何も言ってますんよーだ」

「あっそ」

「そうですー」

「……」

「……」

「お」

「なに？」

「あれ」

「どれ？」

「あそこにあるリンゴ、うまそうだ。ちょっと行ってくる」

「……マイペースな奴」

『オツチャン、コレ一つくれ』

『あいよ、銅三枚だ』

「はあ……。あ、あのネックレス可愛いなあ」

『ほい、三枚』

『よし、持っていきな』

「おお、うまつ」

「……」

「ほれ、静香。お前も食ってみな」

「え？」

「ほれほれ」

「ちよつ、押し付けないでよー!!」

「ほれほれほれ」

「わ、わかつた！食べるから、押し付けんな！ー!!」

「受け取るなら、最初からそうしろよ」

「うるさいなあ、もう。……」

「どうだ？うまいだろ？」

「うん、おいしい」

「だろ？」

「うんっ!!」

「よし、んじゃ次行ってみよー!!」

「おー!!」

それからちよつとして。

「あ、わりい、静香。俺ちよつとトイレ行ってくる」

「えー、なにそれー」

「わりいな。ちよつと待っていてくれ」

「早く帰って来てよ？」

「ああ、わかつてる」

そんなことがあったが、二人はそれなりに楽しんでいた。そして夕方。

「あーあ、楽しかったつ!!」
「そうだなー」
「また、一緒に回れたらいいね」
「ああ」
「なーんか、反応薄いなあ」
「そうか?」
「うん、いつもなら『ああん?』みたいな感じなのに」
「歩き疲れたんだよ、きつと」
「な、ナギでも疲れるんだ」
「当たり前だろ!!俺は人間だ!!」
「アハハ!そりゃそうだ」
「つたく……ほれ」
「え?小物入れ?」
「ちげーよ!!中を見る、中を!!」
「中?……これって」
「……」
「私が見てたネツクレスじゃん!!」
「……」
「い、いつ買ったの?ってか、見てたの!」
「あ、ああ、まあな」
「それで、い、いつ買ったの?」
「分からねえか?トイレ行ってくつて言った時だよ」
「じゃ、じゃあ、あれってこれ買いに行く口実だったの?」
「いや、トイレのついでに」
「そこは嘘でも『そうだ』って言おうよ!」
「いやいや、ホントの事だし」
「ああもう!!雰囲気台無し!!」
「台無し?」
「もういいよ!!てか、どういふ風の吹き回し?」
「いや、前に『女が見ていた物をこっそり買っておき、別れ際に渡

す』って聞いたのを、思い出しただけで」

「誰から聞いたの？」

「親父」

「和さんか……」

「で、やってみた。それだけ」

「ふーん。……期待した私がバカだったか」

「なんか言ったか？」

「いーえ、何も」

「それより……気に入ったか？」

「え？あ、うん……」

「そうか」

「うん……」

「顔赤いぞ？風邪か？」

「夕日のせい……」

「あっそ」

「そうです……」

「とりあえず、帰ろうぜ」

「……ありがとう」

「あ？」

「なんでもないですよー」

「あっそ」

「そうですー」

そして、二人は宿に帰るのだった。

閑話休題！？（後書き）

うおおおおお！！

甘い話を書けないっ！！

次の閑話休題には、ユリウスとクロノの話を書きたいなあ、なんて

最後の閑話休題は自己満足ですので、気にしないでくださいw

それでは、感想バッチコオオオイ！！

閑話休題?!? (前書き)

横道の横道にそれます

なかなか、本編に戻れん……

閑話休題?!?

閑話休題その四

渚・フェン

ユリウス達が食堂で話していた頃、渚とフェンは森の中を疾走していた。

「フェン!!」

「がうつ!!」

「ちよ、速すぎだつて!!」

「がうつ!!」

「だから、追いつけなくなんだろおがああああ!!」

「がうつ!!」

「うおお!!いきなり止まん!!」

「ぐるぐる」

「あ?どうした?」

「ぐるぐる」

「っ!!……この気配は……デカいな」

「がうつ!!」

「まずいぞ……刀は置いて来たし……素手でやるしかないか」

『グオオオオオオオオオオ!!』

「て、図体もデカいな!!」

「アオーーン!!」

「ふえ、フェン!？」

『主よ、我が力を欲するか?』

「は？」

『欲するか？』

「あ、ああ」

『ならば、我が命、主に預けよう』

「おお！？眩しっ！！！」

「アオーーーン！！！」

『グウウウウ……………』

「あれ、フェン？なんで、もも辺りにあった顔が俺の頭より上に？」

「主よ、これが私の本当の姿だ」

『グオオオオ！！！！』

「お、おい、なんか興奮してないか！？」

「安心しろ、主よ。獣よ、死にたくなければ、消え失せろ」

『グウ……………』

「ほ、本当に帰っていきやつた……………」

「他愛もない」

「てか、なんでそんなにデカくなってんだよ？」

「主が私を必要としたからだ」

「あ、さっきの」

「そっだ」

「つか、なんで今まで小さかったんだ？」

「それには、理由があつてな。主が私を呼び出した時、主の魔力は根こそぎ私に移されたのだ」

「ま、マジか」

「つまり、主は魔力を扱う要領で、私を扱えるのだ」

「そ、そうか」

「しかし、私が力を使えば、消費が激しい。だから、普段は魔力を

消費しないように、あの姿をしていたのだ」

「俺の魔力つて、少なかつたのか？」

「いや、かなりの量だ」

「じゃあ、今の姿は魔力を消費してるんだな」

「ああ、多少な」

「それで、多少なんだ」

「力を使ってないからな」

「そうだな。姿が変わっただけだもんな」

「ああ。……主よ、あともう少しだけ、全力で走らせてほしいんだが？」

「ま、またか……。まあいいさ。ついて行ってやるよ」

「がうっ!!」

「あれ？元に戻ったんだ」

「がうがう!!」

そして、日の出まで森の中を一人と一匹は疾走し続けたのだった。

閑話休題その五

クロノ・静香

その日、クロノは森で一人で銃の練習をしていた。

ズドオン！！

「ふう……こんなもんか」

クロノは構えていたDragunovaを近くの木に立てかけた。
そして、COLTを取り出し、構えた。

「次はつと、あの岩を狙うか」

「ドン！！ドン！！ドン！！」

「うーん、精度が低いなあ」

「そうかなあ？」

「うわああ！！」

「そんなに驚かなくても」

「し、静香さん……いつから」

「さつきだよ」

「そうなんですか」

「でも、そんなに精度、低くないと思うけど」

「いえ、低いですよ」

「だって、同じ場所に三発とも集中してるじゃん」

「同じ場所に当てられるようにならないと、父を超えることはできませんから」

「クロノ君のお父さん、すごいんだね」

「ええ、僕の憧れであり、目標です」

「お父さんも嬉しいだろうね」

「そうだといいんですがね」

「そうだよ、きつと」

「それで、静香さんはどうしてここに？」

「私も弓の練習しようかと」

「見せてもらっても、いいですか？」

「いいけど、そんな面白いものじゃないよ？」

「前から思ってたんですけど、静香さんの弓って、普通のよりデカ

「いですよね」

「あ、うん。なんでも威力が出るものらしいよ」

「へえ」

「よし、じゃあ私もあの岩を、狙おうかな」

キリキリキリ……

「すごいですね……簡単に引けるなんて」

「そつでもない、よっ……」

ヒュンッ……

ドコオッ……

「え……」

「うーん、毎回思うけど、威力が出過ぎてるようだな」

「出過ぎですよ……岩、砕けてるじゃないですか……」

「まあ、いつもの事だよ」

「その細腕のどこに、そんな力が」

「細腕だなんて、照れちゃう」

「ニヤニヤしながら言っても、全然説得力無いですよ……?」

「さすがクロノ君。面白いわ」

「ああ、もう……全然褒められた気がしない……」

今日もクロノはいじられていた。

閑話休題その六
クロノ・ユリウス

クロノとユリウスは、ただ今絶賛迷子中。しかも、街の路地裏で。

「ここ、どこでしょう?」

「僕に聞かれても……」

「そうですよね……」

「はあ……」

「どうしましょう?」

「どうしますか?」

「はあ……」

「おい、お前ら」

「はあ……」

「聞いてんのか?お前ら」

「はあ……」

「無視すんなああああ!!」

「さっきからうるさいなあ」

「なんだと、コリア!!」

「で、なんか用ですか?」

「持つてる金、全部置いていきな」

「はあ、めんどくさいなあ」

「てめっ、ケンカ売ってんのか!?!」

「うっさいなあー!!」

ド「オッ!!」

「ひいっ!!す、素手で、壁が、抉れて!!」

「こつなりたくなかったら、僕達を大通りまで連れてってください」

「よ、喜んでえっ!!」

「行きましょう、ユリウスさん」

「す、すごいですね、クロノさん」

「こ、こっちです、アニキ!!」

「あ、アニキって……」

何気に怖いクロノだった。

閑話休題?!? (後書き)

おや、フェンの様子がおかしいぞ？

ってな感じになってしまったあああああ！！

しかも、クロノって怒ったら怖いことが分かった回でした。

次回には本編に戻ります

肝Z……感想バツチコオオイ！！

アベリア盗賊団！？（前書き）

今回はユリウスと静香、フェンは出てきません

あ、ちなみに閑話休題は全部、アベリアでの話です

ではでは、始まります

アベリア盗賊団！？

今日でアベリアに来てから一ヶ月。

今、俺はクロノと二人でギルドに来ていた。ユリウス達には、今日一日自由にしてもらってる。

俺達は次の街へ移動するための依頼を探しに来ていたのだ。

「こんなのどう？」

「うーん、ちと報酬金が少ないな」

「そう言われればそうだね」

「なかなかいいのが無いな」

「そうだねえ」

「ん？」

「お、見つかった？」

「いや、違うけど、コレ」

「ん？なにになに？」

『近隣に盗賊団が出没。そのアジトがアベリアにあると思われる。即急に壊滅させてほしい』

「へえ、アベリアに盗賊団のアジトねえ」

「面白そうだ、受けようぜ」

「いや、僕達は移動するための依頼を……」

「それがねえんだから、いいじゃねえか」

「そうだけど、僕達だけでするの？」

「なんだ？二人じゃ不安か？」

「いや、渚一人でも十分だと思っけど」

「なら、お前もついて来い」

「えー、僕は遠慮しておくよ」

「いいから、いいから」

「全然よくないよ!?!」

「そうか、ついて来てくれるのか」

「僕の話聞いてる!?!」

「聞いてない」

「言っちゃったよ!?!」

嫌がるクロノを引きずって、俺はその依頼を受けたのだった。

「さて、夜になったぜ」
「はあ、なんで僕まで」
「そう言っとなって」
「もうあきらめてるよ」
「んじゃ、行こうぜ」
「うん」

俺達は依頼の情報にあった廃墟に向かった。

「ここか」
「まさにアジトって感じだね」
「よし、行くぞ」
「ちよっ!?!」

俺はかるうじて残っていた扉を蹴破った。

バァン!!

「たのもーうー!!」
「ちよつと!!何正面から突っ込んでんのさ!?!」
「いや、人の気配がしなかったから、一度やってみたかったことを
してみたただけだ」
「な、なんだ……ここにはいないのか」
「ん?」
「どうしたの?」
「なんかおかしい」
「へ?」

俺は足元にあつた石ころを拾い上げた。

「どうすんの、それ?」
「投げるだけだ」

ヒュン!!

「痛っ!!」
「え!?人の声が!?!」
「そこにいんだろ?」
「な、なんでわかつたのさ?」

そう言いながら出て来たのは、黒色の半袖半ズボンを着ている小さな男の子だった。

「男の子……?」
「僕は女だ!!」
「い、ごめん」
「それより、なんでわかつたのさ?」
「お前がいた所だけ、何にも感じなかったからだ」

「そんな……」

「で、そんなに気配を消すのがうまいお前が、こんな所で何してんだ？」

「な、なんでもいいだろ？」

「俺達はな、最近この辺りで出没する盗賊団の討伐に来たんだ」

「へ、へえー」

明らかに様子が変わった少女。

「で、その情報だと、ここがアジトらしいんだが」

「そ、そうなんだ」

「で、そこにお前が気配を消して、潜んでいたと」

少女はキョロキョロ辺りを見渡し始めた。

「な、何が言いたいんだよ？」

「つまり、お前がその盗賊団の一人、もしくはリーダーだと思ってな」

「どうして、そう思うのさ？」

「今までにその盗賊団がして来た事を、教えてもらってな」

そう、俺達はここに来る前に、ギルドの人に今までの事件を教えてもらってきたのだった。

こいつらがして来た事は、食べ物を盗んだり、金を盗んだり、衣服を盗んだり等々。

つまり、悪事と言っても、他の盗賊達みたいに殺人をせず、非常に豊かな場所から少量ずつ盗み出している。

盗み出した量は、一人一人が生きるために最低限必要な量だと推測できららしい。

「だから、盗賊団の奴は、孤児。そういう奴等の集まりだっと思っ
てな」

「臆病な大人ってこともあんでしょ」

「いや、盗みをする時点で、相当な大物だ。臆病なら盗みなんて
できない」

「そ、それはそうかもしれないけど」

「つか、お前一人で盗賊団なのか？」

「いや、なんで僕が犯人って決めつけてんのさ？」

「だってお前。俺が盗賊団の話をし出した途端、慌ててたんだぜ？」

「う……」

「怪しいってもんじゃないよなあ？」

「そ、そうだよ！！僕が犯人だよ！！」

「やっぱりな」

「で、僕をどうするつもりさ？」

「どうするって言われてもなあ……」

「こ、殺すのか？」

「殺すわけねーだろ」

「そ、そうなのか？」

「ああ、依頼主さんに渡す」

「い、依頼主って？」

「この街の役人さんだ」

「ろ、牢屋行きかな？」

「さあな。とりあえず、おとなしく捕まってくれ」

「い、嫌だよ！！」

そう言っつて少女は、腰からナイフを抜いた。

「け、怪我したくなかったら、そこをど「うるせえ」「痛っ」

俺は最後まで聞くことをせず、拳を少女の頭に落としていた。

「俺にナイフ一本で勝てると思ってんのか、あ？」

「ごめんなさいすいませんもう抵抗しません許してください」

「分かればいい」

そして、その少女は俺達に捕まったのだった。

「ていうか、僕やっぱりいらなかったよね？」

クロノの嘆きを聞こえないふりをするのだった。

そして夜が明け。

クロノは宿に戻り、俺は一人で少女を、役人の所まで連れて行った。

「この子が？」

「ああ、本人から聞いた。それでだな、少し話したいことがある」

「なんでしよう?」

俺は、こいつが孤児であり、今までの盗みは生き抜くために必要な行為だったことを説明した。

「ふうむ、なるほど」

「でだな、こいつのした事を許してやってほしいんだ」

「うーん、許してほしい、か」

「だめか?」

「そうしてやりたいのも、やまやまなんだがなあ」

「……」

少女は固唾を飲んで、俺達の会話を聞いている。

「そうだ、こんなのでどうだ?」

「?」

「この近くに教会があるんだか、そこで働いてもらうってのは、どうだろう?」

「罪を償いながら、か?」

「ああ。しかも、そこは孤児院も兼ねているから、ちょうどいい」

「それは名案だな」

そして、少女に俺は説明してやった。

「ホントか?」

「ああ、これでもう盗みなんかしなくても、よくなんぞ?」

「よかった……。ありがとう、兄ちゃん」

「いや、礼は俺じゃなくて、あつちに言ってくれ」

「それもそうだけど、兄ちゃんにも言いたかったんだよ」

「そりゃどうも」

「兄ちゃん、名前は？」

「渚だ。お前は？」

「ルミナだよ。渚」

「呼び捨てかよ」

「いいじゃん」

「まあ、いいんだけどな。ルミナ、元気だな」

「そっちこそ」

そして、俺はその場を離れた。

後日聞いた話では、ルミナの仲間だった孤児達も、教会に引き取られたとか。

「よかったな、ルミナ」

「どうしたの、渚？」

「クロノ、お前がいなかった時に感動のストーリーが生まれていたのだよ」

「え、ホント!？」

「ああ、残念だったなあ！」

「なんで、嬉しそうに言うのさ!？」

「だって、お前いじるの面白いし」

「そんなこと、どストレートに言わないでええええええ!!！」

今日もクロノいじりは、面白いです。

アベリア盗賊団！？（後書き）

今回出て来たルミナは、もう一度出せれたらなあ、と思っています。

それでは、感想バツチコオオオイイイ！！

フェン活躍！？（前書き）

つか、今思ったんだけど、キャラ設定いかされてねえ

フェン活躍！？

ルミナを教会に引き渡した日、俺達は再びギルドで依頼を探していた。が、いいのが見つからず、その日は各自自由になることになった。

そして、その日の夕飯時。

「ね、渚。ちょっと聞いた話があるんだけど」

「ん？」

「なんでも、リスディアで毎年やってる武術大会を二週間後に開くらしいよ」

「へえ」

「で、なんと優勝賞金が銀貨四百枚！！」

「「「よ、四百！！？」「」」

さっきまで静かに話を聞いていた、ユリウス達と一緒に驚きの声を上げた。

「い、今まで苦労して集めた金より、多いだと……」

「そ、それは、すごいわね」

「すごいです……」

三者三様の反応をみせた。

「でも、明日馬車でここから出たとしても、ギリギリ間に合うかどうかかって所らしいよ」

「そ、そんな……」
「馬車を借りるお金もないですし……」
「歩きじゃ、到底間に合わないよねえ」
「……」

俺はふとフェンを見た。

「がうつ!!!!」
『主よ、私を使ってくれ』

頭の中に直接響いてきた、フェン（大）の声。

「いいのか？」
「がうつ!!!!」

どうやらいいようだ。

「一つだけ、方法がある」
「「「え!!!!?」」」
「フェンに乗る」
「「「はぁ……」」」

なんだ、その「頭おかしいんじゃないかね？」みたいな溜息は。

「まあ、見た方が早い。明日、日の出と共にこの街を出るぞ」
「ナギがそういうなら……仕方ないなあ」
「渚、頭大丈夫？」
「静香さんがそう言うなら……」

まあ、何とか了承してくれたみたいだ。

「クロノ、後で殴る」

「なんで!？」

「なんかムカついたから」

「そんな理由で殴らないでよ!？」

結局俺はクロノを殴ることはできなかった。クロノが全力で逃げ出したから。

そして、次の日の朝。
俺達は街外れの野道にいた。

「ここらへんでいいよな？」

「がうつ!!！」

「フェンちゃん、やる気満々なんだね」

「渚が無茶言ったのにねえ」

「クロノさん……」

クロノがまたなんか言ったような気がする。

よし、後で殴ろうか？うん、殴ろう。何もおかしいことは無い。

「いや、おかしいよ!？」

む、心を読むとは、なかなかやるな。

「いや、読んでないよ!？普通に喋っちゃってるから!！」

「な、なんだと……」

「そんな意外そうな顔しないでよ!！」

まあ、そんな馬鹿なやり取りは、ここまでにしておこう。

「フェン、行くぞ」

「がうー!!」

「命ずる!!真の姿を現せ!!」

こんな事言わなくてもいいんだけど、なんか言ってみたかったんだよ。

言ってから分かったけど、無茶苦茶恥ずかしい。

「主よ、声に出さずともいいのだが」

「分かってるよ!!一回したかったの!!」

「そうか」

「……」

「どうした?お前ら」

三人とも固まってる。

「いや、ふえ、フェンだね?そこにいるの」

「ああ」

「そうだぞ、クロノよ」

「ええ!!?フェンちゃん!!?」

ユリウスと静香は二人そろって驚きだした。

「フェンちゃん、ホントはそんなにデカかったの!?!」

「さ、さすがは『フェンリル』です……」

「ま、さっさとそのリスディアへ行こうぜ」

「さあ、乗ってくれ」

そう言つて、伏せるフェン。
それでも、結構な高さがあるんで、ユリウスが乗るのに苦労して
いた。

ようやく、俺以外の全員が乗った所でフェンを立ち上がらせた。

「あれ？渚は？」

「俺は走る。訓練を兼ねな」

「つ、ついてこれるの？」

「ナギなら大丈夫だつて。化け物みたいな奴だよ？」

「あ、そうだった」

「てめえら、後で覚えとけよ」

「何を？」

「殺すつー！！」

「フェン、出発だー！！」

「捕まっておけ、三人とも」

そして、フェンはかなりの速さで走り出した。

「待てゴラァ！！」

俺もそれを追つて走るのだった。

そして、アベリアを出て十日目の朝。

「はあ、はあ」

「お疲れ、ナギ」

「渚、大丈夫？」

「渚さん？」

三人から声を掛けられたが、返事ができない。なんてったって、この十日間全力とまではいかないものの、八割の力で走り続けた。

ユリウス達は、フェンの背中寝たり、一日三回の休みの間に飯を食ったり等々。

疲れるわけがなからう。

「主よ、そろそろ私も元の姿に戻っておいた方がいいのでは？」

確かに、街がもう近いから、元に戻ってもらおう。

「じゃ、も、元、に戻って、くれ……」

「分かった」

そして、フェンは元の姿に戻ったのだった。

その後、俺の息を整えるのに要した時間は一時間だった。

フェン活躍！？（後書き）

渚、マジ化け物w

感想バツチコオオオオイイイイ！！

衣装替え！？（前書き）

久しぶりの更新

衣装替え！？

俺達がりスディアに着いたのは、大会の開始二日前だった。

フエンを元に戻し、二日かけて街へ入ることができたのだった。

「ようやく着いたね」

「そうですねえ」

「渚、宿を探そうよ。疲れた」

「てめえ、お前以上に俺は疲れてんだよ」

「そんなの、自分のせいだよ」

「なんだと？」

「なんだよー？」

「オラー！！」

「うわっ！！何すんのさ！？」

「そーいや、お前を殴ってなかったと思ってな」

「僕だけ！？静香さんは！？」

「あいつは女、お前は男」

「差別っ！！」

「うるせえええ！！」

ドコッ！！

「へぶっ！！」

「あー、すつきりした」

「平手であんな音出すとか、ナギやりすぎ……」

「平手で済ましてやったんだ」

「キュー……」

「クロノさんが気絶してますよ！？」

「うーん、これで気絶か。クロノもまだまだだな」

「ナギ……」

「渚さん……」

なんだか、すごい変な目で見られてる気がする。

が、気にしない、気にしない。

「さ、宿を探そう」

「そうね」

「クロノ、起きろ」

「ハッ！！あれ？今さっきまでお花畑にいたのに」

「死にかけてたの！？」

クロノは何とか一命を取り留めたようだった。

リスディアに着いた日は、宿でそのまま寝た。

そして、大会前日。
俺達は出場登録をしていた。

「個人トーナメントとクラントーナメントがありますが、どちらに
しますか？」

受付の女性はそう聞いてきた。

「クランというのは？」

「クラントーナメントは四人から八人で一チームとし、そのチーム
で戦うというものです」

「どっちかだけしか出れないんだよな？」

「いえ、どちらとも出れますよ」

「そうなのか？」

「はい。明日から三日は個人、その後三日でクラン。
そして七日目に個人とクランの準決勝、決勝。といった感じなの
で」

なるほど、一週間かけてするのか。

「じゃあ、どっちにも出ようかな？どうする？」

「僕はいいよ」

「私も大丈夫だよ」

「えっと、私はクランの方だけに参加させてください。個人は自信
が無くて」

「わかった。じゃあ」

「わかりました。では、クランの名前を」

クランの名前？

「うーん、フェンリルでいいや」

「渚、もっと考えようよ……」

「他になんかあるか？」

「いや、それでいいんだけど」

「なら、フェンリルで」

「わかりました。フェンリルですね」

こうして俺達は登録を終えたのだった。

その日の午後、俺達は服屋に来ていた。

オルヴァさんからもらった服を、ずっと着ていたので、血や土埃で汚れてしまっていた。

「試合に出るんだったら、綺麗にしとかなくちゃ」

この静香の一言で、服を新しくするのだった。

「じゃあ、私とユリウスちゃんはこっちの方にいるから」

「わかった。クロノ、行くぞ」

「りょーかい」

そして、俺達は広めの店の中で、二手に分かれたのだった。

「うーん、僕は新しい形の服はいいや。これと似たようなものにし

ておくよ」

そう言つて、クロノは適当に同じような服を買い終えたのだった。

面白くない奴……

「渚、失礼な事考えたでしょ」

「いんや、これっぽっちも考えてない」

「本当は？」

「面白くない奴だと思つてた」

「言つちやつたよ!？」

さて、俺はどうしよう。

「うーん、この服、結構動きやすかつたからなあ」

「じゃあ、一緒の物にするの？」

「いや、上は同じにして、下を変えようかな」

「こんなのは？」

クロノが俺に見せてきたのは、ベージュのジーパンみたいなものだった。

「お、いいかもな」

早速俺は、今上に着ている物と同じ形の服を見つけ、試着室で着替えたのだった。

「へー、結構伸縮すんだな、このズボン」

「渚、このブーツが一緒に置いてあったから持って来たよ」

「ブーツ？」

クロノの手にあるブーツは、履くと膝下まで来るような黒いブーツだった。

「一応履いてみるか」

俺はブーツにズボンの裾を入れ、ブーツを履いた。

「お、軽い」

見た目は動きにくそうだったが、実際には機動力に支障はない。

「これにしよう」

「お、僕結構役に立ったね」

「戦闘でも役に立って」

「役に立ってなかったの、僕!？」

「さーて、買ってこよう」

「ちよつ、答えてよ!！」

しばらくクロノは喚いていたのだった。

俺が服を買って終えたと同時にぐらいに、静香達も買い物を終えたよ
うだ。

「結局今までと同じの買ったちゃった」

「私もですね」

皆やっぱり着慣れたものが良いようだった。

フェンは俺達がい物をしていた間に、広場で遊んでいた子供達と

仲良くなっていたのだった。

個人トーナメント!?

個人トーナメント、初日。コロッセオみたいな場所。

まず、リスディアの王が激励の言葉を今大会の参加者に送った。そして、基本的な試合のルールの説明があった。

- 一、凄腕の医療班がいるため、致命傷であっても問題ない。
 - 二、勝敗は戦意喪失、もしくは気絶。危険な場合のみ審判が止めに入ること。
 - 三、後は何でもあり。自分の流儀に従って、全力を出し合うこと。
- だいたい、こんな感じ。
- そして、個人トーナメントが始まったのだった。

クロノが大会最初の試合に出るのだった。

side クロノ

僕が最初かあ……。

なんというか、緊張する。

「まあ、頑張つてこい」

な、渚が励ましてくれるなんて……。意外だ。

「なんか、失礼なことを考えただろ？」

「いや、そんなことは無いよ」

「そうか」

まあ、いつも通りやればいいだけ。

よし、頑張るぞ！

僕は大量の観客が注目する中、大きいバトルアックスを担いでいる
奴と向き合っている。

「てめえが俺の相手か」

「そうだけど」

「ハッ！弱そうだな」

「まあ、そう見えるだろうね」

「両者、名乗りを」

「ブルだ」

「クロノです」

「では、始めっ！！」

審判の合図と共に、ブルと名乗った人はアックスを振り下ろしてきた。

「おらあああああ！！」

渚の蹴りより遅い。見切るのは簡単。

「ふっ！！」

とりあえず、体を少しだけずらし、カウンターの要領で、相手の顔面に蹴りを本気で入れる。

「ブッ！？」

ブルさんは後ろに吹っ飛んで、地面に突っ込んでしまった。

「ゲフッ」

「勝者、クロノ！！」
「え」

今の一撃で気絶してしまったようだ。
なんというか、ご愁傷様です……。

side out

たった一撃で相手を沈めたクロノ。
なんとというか、ご愁傷様だな……。

そして、しばらくすると、俺の番になった。

「さて、行ってきますか」

俺は観衆の前に出た。

「すごい熱気だな」

その一言だった。

そして、相手の奴は、俺の身長を軽く超えている大男だった。

「テメエか、俺様の相手は」

「……」

「両者、名乗りを」

「ブルだ」

なんかデジャブ。

「決して名前を考えるのめんどいとかじゃない」

「誰に言っただよ……。阿良木だ」

「では、始めっ……」

「おらあ……」

ブルは殴りかかってきた。

「邪魔なんだよ……」

相手の懐に潜り込みながら、拳に気を溜める。

「阿良木流 燐!!」

気を放つと同時に、拳を相手の腹に叩き込む。

「ゲフツ!!」

相手の勢いを殺す程度の力で殴った。

「阿良木流 昇華!!」

宙に浮いている相手の体に、左足を軸にした回し蹴りを放つ。

「あああああああ……」

空高くまで飛んで行ってしまった。

「勝者、阿良木!!」

「これでいいのか？」

なんというか、やり過ぎた感がある。

ウオオオオオオオ!!

……観客は盛り上がってるが。

俺が終わった後すぐに、静香の番が来ていた。

一人で戦うのって初めてだから、ちょっと緊張。

「両者、名乗りを」

「静香です」

「リリイ・レオンハルトだ」

相手はポニーテールにしても、腰まである綺麗な金髪に緑色の瞳の女性だった。

「では、始めっ……!」

私は合図と同時に、距離を取りながら弓を取り出した。

「ほう、速いな」

リリイさんはまったく動こうとしていなかった。
ましてや、剣すら抜いていなかった。

「貴殿は強そうだ。ならハンデをやるう」

「ハンデ?」

「ああ、一撃だ。貴殿の全力を一撃で私に当ててみる。避けはしない。防ぎはするが」

なんだろ。なんだかすごいなめられているような……。

「そう言っならっ……」

キリキリキリ

「ふっ!!」

ヒュン

「ほっ……」

ガキイン!!

「えっ!!」

一瞬で腰から抜いた剣で、私の全力がいと簡単に弾かれた。

「こんなものか」

「こんなものって……」

「では、終わりにしよう」

そう聞こえた時、私は地面に倒れていた。

「え……」

「審判よ、これで終わりだ」

「しよ、勝者、リリイ・レオンハルト!!」

ウオオオオオオ!!

なにが、なにが起きたの、今……。
なんだか、自分の弱さを突き付けられたような感じだった……。

side out

リリィ・レオンハルト……。あいつは強いな……。あの静香の一撃を弾くとは、意外と難しいものことなのだが……。

「面白い……」

「どうしたの、渚？」

「いや、なんでもねえよ」

そして、個人トーナメントの三日間を終えたのだった。俺とクロノは準決勝で当たることになった。

当然あのリリィ・レオンハルトも残っていた。おそらく、決勝に出てくるだろう。

クロノには悪いが、少々本気を出させていたかどうか。

俺は、リリィ・レオンハルトとやり合いたいんだからな……。

クラン戦！？（前書き）

クラン戦でし

克蘭戦!?

俺達は今、克蘭戦に出ている。
相手は統率のとれた六人。

「はぁ!!」

右から踏み込んで来た男に、クロノが後ろから銃弾を撃ち込むが、それを躲し、俺に殴り掛かってきた。

「レインフォール!!」

ユリウスが俺を中心に氷柱の雨を降らした。
俺は氷柱を避け、同じく避けている相手に蹴りを放つ。

「オラツ!!」

「くっ……!!」

男は仲間に引つ張られ、どうにか氷柱と蹴りから逃れた。

「めんどくさい奴等だな」

「渚、どうすんの?」

クロノが呼びかけてきた。

「クロノ、お前も前衛に出てくれ。俺一人じゃ、避けられる」
「分かった」

そして、前衛は俺とクロノ、後衛は静香とユリウス、といった配置になった。

向こうは前衛二人、中衛二人、後衛二人。

「ユリウス、静香は俺達の援護、クロノは俺の動きに合わせて、相手を確実に潰すぞ」

「わかったわ」

「わかりました」

「できるだけやってみるよ」

向こうも動き出した。

俺とクロノは同時に飛び出し、飛び込んできた一人にクロノが右ストレートを放つ。

それを避けた所に、俺が蹴りを叩き込む。

「ぐっ……」

しかし、俺の蹴りはもう一人の前衛にガードされていた。結構ダメージはあつたはず。

「クロノ!!!」

「オツケー!!!」

クロノはガードをしてよろめいている男にハイキックをきめ、その男を沈めた。

俺はその間にもう一人の男に向かった。

「ナギ、伏せて!!!」

「!!!」

俺は咄嗟にその場に屈んだ。

ヒュンッ!!

ガキイイイン!!

俺の真上で静香の放った矢と、敵の矢がぶつかり合った。その間に前衛の男は、距離をとっていた。

「くそつ、終わらねえぞ」

「渚、刀抜いたら？」

「いや、決勝まで刀はとっておきたい。

それに、ここはチームワークの現状を知るのにいい機会だ。

俺が一人で無双した所で面白くもなんともないだろ」

「まあ、刀抜いたら、格段に強くなるもんね。今も十分強いけど」

しかし、刀を抜かないとなると、頼りになるのは、親父の使ってた体術。

「渚さん、クロノさん。私が相手の気を逸らします。その間に」

「何すんだ？」

突然のユリウスの提案は、面白いものだった。

「わかった、じゃあ、行くぞ？」

「オッケー」

「私もいいよ」

「では……、フラッシュユ!!」

バッシュウツ!!

ようは、相手の視界を奪い、一瞬で片付ける。
これは、俺とクロノだから出来ることだった。

「クロノ!!」

「わかってるよ!!」

俺達は一瞬でトップスピードに乗り、そのまま敵を殲滅。

「勝者、フェンリル!!」

ウオオオオオ!!

ふう、なんとというかすごい疲れる試合だった。

「チームワークって難しいね」

「クロノ、結構よかったぞ」

「マジで!?!」

「ああ、俺が呼んだだけで、相手一人沈めてたし」

「そうかなあ、えへへ」

「ま、あとは前、後衛同士の連携をもっと強くしないとな」

「そうだね」

しかし、俺達は惜しくも準決勝に出ることはできなかった。
準々決勝で当たったのは俺達なんかよりも、チームワークができてい
る克蘭だった。

「ま、あれは仕方ないよ」

俺以外が沈められ、俺が絶対しないようなミスをしてしまった。

後ろを取られ、首に剣を押し当てられたのだった。

「……………」

柄にもなく、落ち込んでしまった。

今後の課題に、チームワークの強化が追加されたのだった。

クラン戦！？（後書き）

ふう、今回は短めですね

さて、次はリリイさんの登場だあ W W W

感想、バッチコオオツオオオイ！！

クロノと戦闘！？（前書き）

戦闘シーンがうまく書けないぜ（、・・、）キリッ

クロノと戦闘!?

そして、大会最後の日。クラン戦の決勝も終わり、個人戦の準決勝が始まるのだった。

「さあー、始まりました!!個人トーナメント、準決勝!!」

なんと、最終日だけナレーションが付くようだ。

「なんと、準決勝で戦うのは同じクランのメンバー!!前衛二人の熱い戦いから目を離すなあああ!!」

ウオオオオオオオオオ!!

すさまじい熱気、歓声。

そんな中、俺達は向かい合っていた。

「渚、悪いけど勝たせてもらうよ」

「そりゃ、こっちのセリフだ」

「さあ、いよいよ始まるぞ!!」

「両者、名乗りを」

「クロノ・ノワール」

「阿良木渚」

「では、始め!!」

合図と同時にクロノは腰からCOLTを取り出し、撃ってきた。

「ふっ!!」

俺は体を逸らし、それを避け、腰からナイフを取り出し投擲。

「うわっ!!」

「まだまだ!!」

「ちいっ!!」

クロノはすぐさまP226に持ち替え、投擲したナイフを撃ち落とす。

「オラアア!!」

俺は最後のナイフを投げたのと同時に、飛び出した。

「くっ!!」

ガシヤッ!!

クロノは最後のナイフを避け、俺に銃を向けてきた。

「甘いぞ?」

「え?」

俺は刀を一本だけ抜くと同時に、一閃し、P226を破壊した。

「くそっ!!」

「ハアア!!」

手首を返し、胴を横薙ぎした。

が、クロノは後ろに飛び、それを避け、COLTで俺に撃ち込んできた。

その弾丸は、俺の頬を軽く裂き、後ろに抜けて行った。

「壊れるっ!!」

「なっ!?!」

踏み込み、COLTも一閃し破壊。

「くっ……そっ!!」

最後の銃であるDragunovaを取り出し、クロノは距離をとって行った。

「これでも、くらえっ!!」

ズドオン!!

「ハッ!!」

ギイン!!

俺は刀を振り、弾丸を弾く。そして、刀に気乗せる。

「阿良木流刀技 閃光!!」

刀を振りぬき、気を放つ。

「!?!」

クロノはDragunovaを手放し、伏せた。
その途端、Dragunovaは空中で真っ二つになっていた。

「そんな、Dragunovaまで……」

「どうする、まだやるか？」

「いや、もう無理だよ」

「勝者、阿良木!!」

ウオオオオオオオ!!

そうして、俺達の戦いは終わりを告げた。

「ヒドイよ、刀抜くなんて。それにナイフも」

「仕方ないだろ、クロノが本気出したんだから」

「はぁ、新しい銃探さないと。もう使い物にならないよ」

「悪いな」

「いいよ、勝負だったんだし」

俺達は改めてお互いの強さを確かめ合ったのだった。

そして、決勝。

「さあー、ついに決勝！ーなんと、どちらも今大会初出場！ー！」

俺はドイツの軍服に似ている服を着ている、リリイ・レオンハルトと向かい合っていた。

「この戦いの勝者が、大会の優勝者だああああ！ー！」

ウオオオオオ！！

「なあ、あんた、一回戦の相手、覚えてるか？」

「急になんだ？貴殿のクランのメンバーだったか？」

「ああ」

「ほう、敵討ちか？」

「そんな大層なもんじゃねえよ」

「両者、名乗りを」

「リリイ・レオンハルト」

「阿良木渚」

「では、始めっ！！」

そして、俺とリリィ・レオンハルトの戦いは始まったのだった。

クロノと戦闘！？（後書き）

ふ、ふふふふ、戦闘シーンがムズイぞ……

さて、次回は作者の大好きなリイがフルで出てくるよお W W W

今回の技説明

阿良木流刀技 閃光

気を刀に乗せ、神速で振り抜く

早い話がソニックブームみたいなもの

決勝！？

「始めっ！！」

審判の声と同時に、俺は二本とも刀を抜いた。

「さ、始めようぜ？」

「貴殿にもハンデをやるう」

「ああ？」

「全力の一撃を私に当ててみる」

「そりゃこつちのセリフだったの。」

「なんで格下からハンデもらわんといけんだ」

「なっ！！私が格下！？」

「違うのかよ？」

あからさまに挑発してるのに、向こうは完全に乗ってしまっていた。

「い、いいだろう……ならばっ！！」

フッ

俺の視界からレオンハルトが消えた。

普通の奴なら、静香みたいに、一瞬でやられていただろう。
だが、俺はこつというのは、親父に何度もされてる。

「甘いんだよ！！」

俺は振り返りざまに、ハイキックを放つ。

「なっ!!！」

レオンハルトは俺の蹴りを、紙一重で防いでいた。

「オラアアアッ!!！」

「くっ!!！」

そのまま足を振り抜き、吹き飛ばす。

「どうした?そんなもんか?」

「なめるなっ!!！」

剣を抜き、正眼に構えたレオンハルト。

「ハアアア!!！」

勢いよく踏み込んでき、そのまま胸を一閃。

俺は後ろに飛び、それを避けた。

「風を切り裂け、ライトニング!!！」

その掛け声とともに、レオンハルトの上空から、稲妻が飛来してきた。

「うおっ!!！」

いきなりの魔法に驚いたものの、何とか避けた。

「稲妻より動きが速いなんて……」

「どうしたよ？まだまだ本気じゃねんだろ？」

「くそっ！！」

レオンハルトは、再び剣を正眼に構えなおした。

それからしばらく、俺がした事は全てレオンハルトの攻撃を避け、時々反撃するぐらいだった。

「く、一撃も当たらないなんて」

めっちゃ悔しそうなんですけど……。

「じゃあ、次の一撃は避けねえよ。防ぐけど」

「ほ、本当か？」

「ああ、本当だぜ？」

そろそろ、俺も終わりにしたかった。

レオンハルトには悪いが、正直期待外れだった。

バランスが取れていいんだが、秀でているものが全くない。つまり、決定打が皆無なのだ。

「ならば……」

レオンハルトは息を整え、詠唱を始めた。

「月と日が重なりし時、訪れる闇を切り裂かん。我を守りたまえ、神の光よ……！！」

レオンハルトの剣が眩い光を放ち出した。

その途端、周囲の空気がガラツと変わった。

「光の審判者《ブレイズジャツチメント》」

そして、その光は俺に向かって光速で、迫ってきた。

「うおっ……おおおお！！」

俺は咄嗟に刀を交差させ、防いだ。が、嫌な音が聞こえた。

ピシッ

「しまっ……!!」

刀が耐え切れず、砕けてしまったのだった。

side リリイ

あの技を人間に使ったことは無かったが、あれが私の本気だった。

「審判、もう終わったぞ」

呆けている審判に声を掛けた。

「しよ、勝者……」

「おーお、いってー……」

「!?!」

ザワザワ……

振り返ると、そこには倒したはずの相手が土煙の中、立っていた。観客もどよめき、私自身も信じられないでいる。

「こんなに痛かったのは、親父の奥儀をくらった以来だな」

「な、なんで、立っていられる……?」

その一言をようやく絞り出すように言えた。

「そりゃ、ほら、俺が本気を出したからで」

その時、強めの風が吹き、土煙が消えた。

「!?!」

驚きのあまり、声も出せなかった。
なぜなら、今まで普通だった肌の色、瞳の色が赤黒く染まっていたからだ。

「阿良木流奥儀 紅龍。それがこの状態の名前だ」
「どう、なってるの……?」

人とは思えない風貌になることが、彼の奥儀だということのか?

「俺は、生まれつきこんななんだよ。俺の先祖に一人、異常な奴がいてな。そいつの遺伝を俺が 強く受け継いだってだけの話さ。
ま、おかげで化け物みたいになっちまうんだけどな」

体質だつていうの?あの異常な姿が?
でも、なんであんな悲しそうな顔をしてるんだろう……。

「この髪の色は、最初は黒だったんだが、初めてこの状態になった時の後遺症でな。真っ赤になっ ちまっただよ。それだけで、周囲の人は気味悪がった」

私は何も言えず、ただその話を聞いているだけだった。

「ま、こんな話はどうでもいい。さっさと終わらそう」
「く、来るなら来なさい!!」
「んじゃ、遠慮なく……!!」

そして、彼は私の視界から、消えたのだった。

s
i
d
e

o
u
t

俺は一気にレオンハルトに近づき、右ストレートを放つ。

「くっ……!!」

それを紙一重で躲したレオンハルトは、俺の腕に剣を振るってきた。

ザシュッ!!

その剣は容赦なく、俺の腕を斬りつけた。が、傷はすぐふさがる。

「そんな!!」

「悪いな、今の状態じゃ、お前に俺を倒すことはできない」

そして、俺はレオンハルトの眉間に人差し指を当てた。
そこから気を流し込み、平衡感覚を奪う。

「っ!!」

レオンハルトは、その瞬間その場に座り込んだ。

「な、なにを、した、の？」

「お前の平衡感覚を一時的に、乱しただけだ」

「そ、そんなこと、普通、できないでしょ……」

気のせいか口調が変わってきたレオンハルト。

「どうする？降参するか？」

「この状態で、どうやって戦えっていうのよ……!!?」

「しょ、勝者、阿良木!!」

ウオオオオオオオオオオ!!!!!!

今までで一番の歓声が上がった。

そんな中、俺はレオンハルトを助け起こしていた。

「大丈夫か？」

「頭が痛い……」

「すまん、やり過ぎた」

「あれ、もとに戻ってる？」

「ああ、今じゃちゃんと制御できてるからな」

「そ、そう。でも、なんで今までみたいに殴らずに、あんな回りく

「どいことを？」

「いや、そりやお前が悪い奴でもないし、女だから殴るのはなあって思っただけで」

「お、女!？」

「違うのか？」

「ち、違わない!!……けど……」

「けど？」

「女として見られたのは、初めてというか……」

一瞬気まずい空気が流れた。

「どうして女として見られなかったんだ？」

「だって、男でもないのに、剣を握ってるし、そこらの男よりは強いし……」

「なるほどなあ」

「だから、驚いたというか……」

「へえ。お、救護の人達が来てくれたな。んじゃ、俺はここで」

「あ……、うん……」

「おいおい、顔が赤いぞ？熱でもあんのか？」

「いや……なんでもない……」

こうして、俺はこの大会で優勝したのだった。

決勝！？（後書き）

今回の技説明

阿良木流奥儀 紅龍

阿良木家でも渚だけ使える奥儀

全身赤黒くなり、再生能力が格段に上がる

さらに、その他の能力も格段に底上げされる

感想、バツチコオオオオイイイイ！！

刀復活!?

俺は今、一人で王家専属の武器屋に来ていた。

なんでこんな所にいるかというと、それは前日の表彰式まで遡る。

俺は表彰式が終わった時、王の所まで連れて行かれた。

「わしは、感激した!!」

王が突然、そう言って席から立ち上がった。

223

「貴殿の戦いぶりに、わしは感激した!!」

「はあ、ありがとうございます」

「そこでだ、貴殿に優勝賞金の銀貨四百枚以外に、なんでも一つ言ってみる」

「？」

「もう一つ、景品を付け足そうと言っているのだ」

「ああ、なるほど」

「どうだ?何かあるか?」

「なら、刀を二本ほど」

「カタナ?」

「俺が使っていた武器です」

「おお、あれか。ならば王家専属の武器屋に行くといい。あそこは何でもあるからな」

そして、現在。

「おう、アンタが王様の言ってた奴か？」

「ああ」

「確か刀だったな？」

「おお、伝わってるんだな」

「ちよっと待っててくれ、今持ってくるから」

そう言って、オツチャンは店の奥に消えて行った。

その間、俺は店の中を見て回った。

「へえ、なんか不思議な武器だな」

俺の目に留まったのは、神々しい、禍々しい、どちらともつかない
雰囲気を持つ二丁銃だった。

「おい、そりゃあぶねえぞ？」

「え？」

いつの間にか後ろに立っていたオツチャン。

「危ないとは？」

「それは、持ち主を選ぶ。選ばれなかった奴が持つと、命を吸い取られて死んでしまう」

「そんな危ない物だったのか」

「ああ。それより、ほれ。これでいいだろ？」

差し出された刀は、握ると手に馴染み、重さも前と同じ。

「すげえ、まったく同じだ」

「そりゃそうだ。アンタの試合を見てたからな」

「それだけで、ここまで再現してくれるとは」

「それは、俺の腕の見せ所ってな」

「ありがてえ」

「いいつてことよ。また来いよ」

「来ていいのか？王族専属なのに」

「王様から許可が出ている」

「マジか。んじゃ、困った時は来るよ」

「おう」

こうして、俺の刀は二本とも復活したのだった。

s
i
d
e

ク
ロ
ノ

渚が刀をもらって来た日から二日目の夜。

「ありがとうございます」

僕は、新しい銃を探していた。しかし、なかなか見つからない。

「はあ、どうしよう」

そんな時だった。

突然、僕の近くで悲鳴が上がった。

「きゃあああ!!」

「な、なにがあつたんだ?」

その悲鳴を聞いた人達が、どんどん逃げていく。そして、視界が開け、見えたのは魔物。

「な、なんでこんな所に魔物が」

「うっうっうっ……」

「し、しかたない、体術で追い払うしかない」

僕はその魔物と対峙した。

「うっうっうっ……」

「ハアッ!!」

踏み込み、右ストレート。

「うっうっうっ……!!」

「もういつちよ!！」

連続して蹴りを放ち、最後の蹴りで吹き飛ばす。

ドゴオン!!

吹き飛び、壁に激突する魔物。

「うっうっ……」

すると、魔物は消え、その場に二丁の銃が落ちた。

「な、なんだ？」

その銃を拾い上げた途端、周囲の景色が変わった。
何も無い真っ白な世界だった。方向感覚が無くなってしまふような世界。

「あなた、銃を触ったの？」

後ろから突然声を掛けられた。

後ろにいたのは、真っ白で長い髪に真っ白な肌。碧眼で、白い服を着ていた。

「誰ですか？」

「それはこっちのセリフ。この銃がどういう物かわかってるの？」

「え？」

「どうぞやら知らないようね」

知ってるも何も、話自体が見えない。

「この銃は呪われた物。持ち主を選び、その者以外が持てば、死んでしまう」

「は!?!」

「私は、この銃に宿された精霊。この銃が暴走しないように抑えているわ」

「暴走つて、もしかしてあの魔物の事?」

「ええ、持ち主がいない時は、私でも時々抑えれなくなる」

「それで、勝手に動き出したと」

「ええ。それより、早くこの銃から手を放しなさい」

そう聞こえた途端、周囲が元の風景に戻っていた。

「!?!」

しかし、突然挟られるような痛みが全身に走った。

「うぐっ!?!」

あの女性の言葉を思い出し、銃を捨てようとしたが、手に吸い付いたように離れない。

「ぐ……!?!」

未だに激痛が走っている。

どうなってるんだ……!?!?

「……あれ?」

気が付くと、痛みは引いていて、銃も持ったまま。

『どつやら、選ばれてしまったようね……』

頭に直接響く声は、あの女性の声だった。

「どついうこと？」

『あなたは選ばれたの、その銃に』

「え」

『このままじゃ、話しづらいから』

そう聞こえた時、目の前にあの女性と、真っ黒な布で全身を包んでいる人が立っていた。

「え、そつちの人は？」

「……」

「呪いの原因よ」

「はあ!？」

「私は彼を抑えるために宿された」

「……」

「で、彼があなたを持ち主として選んだの」

気が付くと、手から銃が消えていた。

どつやら、話の流れから行くと、この二人が銃になっていたと考えられる。

「……よろしくな、クロノ」

「話せるの? てか、なんで僕の名前を？」

「……ああ、今さっきクロノの中を見させていただいた」

「もしかして、さっきの激痛が」

「……ああ。……俺は、リフェル」

s
i
d
e

o
u
t

そうして、大会が終わってから五日目。
俺達は早速、次の街へ行くための依頼を探しにギルドに来ていた。

「お、これは？」

「デフォルムへ向けてか、報酬も悪くねえな」

「そうだね。ね、ナギ。デフォルムって所は、食文化が発達してるんだって」

「へえー」

「それで、向こうに着いたら、パーツとなんか食べようよ」

「そうだな、金に余裕も出て来たし」

「いいねえ」

「そうですね」

「がっつー!」

そんな平和な会話をしていると、声を掛けられた。

「すまない」

「ん？」

振り返ると、そこには見たことのある女性がいた。

「レオンハルトだったよな？」

「あ、ああ」

「どうしたんだ？」

「その、だな。私も仲間に入れてくれないか……?」

驚いた。ただその一言。

だって、自分を負かした相手と一緒に旅しようなんて、俺は思わない。

「と、とりあえず、俺じゃなくて、ユリウスに聞いてくれ」

「ま、また私ですか!？」

「俺達は、お前の旅の同行者。リーダーはお前」

「そ、そんなあ」

「ほら」

「お願いする!！」

クロノの時も同じだったな。

「い、いいですよ。お、多い方が楽しいですし……」

「ありがとうございます!！」

なんと、ユリウスはレオンハルトに抱きつかれた。

「!?!?!?!?!」

ユリウスが混乱している。

「レオンハルト、ユリウスがヒドイことになってる」

「ハッ、すまん」

「い、いえ」

「では、改めて、私はリリイ・レオンハルトだ。リリイと呼んでくれ」

「私は、神崎静香だよ。静香でいいよ」

「ゆ、ユリウス・ラファイエです。ユリウスと呼んでください」

「クロノ・ノワールです。クロノって呼んでください。それと、二人とも」

「……リフェルだ」

「シエルフよ」

「なんと、精霊銃か」

「精霊銃っていうの？」

「ええ」

「……ああ、一応そういうことになってる」

こうしてリレイも加わり、俺達は五人と精霊二人、魔獣一匹という奇妙な集団になったのだった。

刀復活！？（後書き）

キャラ設定

リフェル

闇の精霊。古の魔術師にシエルフと共に銃に宿された。

身長は190。素顔を見せることはあまりない。

どうしてかクロノを選び、クロノに使われることを良しとした。普段は無口。シエルフが代わりに喋ることが多い。

シエルフ

光の精霊。古の魔術師にリフェルと共に銃に宿された。

身長は162。腰まである綺麗な白髪、白い肌、碧眼が特徴。

リフェルと意外にも仲がいい。普段はリフェルの分も話す。

リリイ・レオンハルト（17）

渚に惚れ、一緒に旅をすることにした。

自分より強い上、女として扱ってくれたことから、渚にベタ惚れ。

使っている武器は「クルセイダー」。魔法も使うためバランスが取れている

ブレイズジャックメント
奥儀は「光の審判者」

ここら辺で、キャラの強さの強弱を

渚（紅龍）>>>>>>渚（二刀流）≡フェンリル（大）>渚（
一刀流）>クロノ（精霊銃）≡リリイ 渚（体術）≡クロノ（銃&

体術) > 静香 II ユリウス

こんな感じ。

次から新しい章に入りたいと思います。

感想バツチコオオオイウイイ!!

旅のお供は、ドジッ娘魔法使い！？（前書き）

今回から、新章に入ります。

今のところ、この章限定のキャラを作ります。

旅のお供は、ドジツ娘魔法使い！？

デフォルムに向け、出発する日の朝。

俺達は依頼主と共に、馬車に荷物を積み込んでいた。

「これで最後だな」

「よし、じゃあ、乗ってくれ。早速出発しよう」

そして、出発しようとした時、一人の少女がこちらに駆けてきた。

「すみませ〜ん、乗せてくださ〜い」

「ん？」

「すみません、私も乗せてもらえませんか？」

「いや、いいけどよ。なあ、アンタらもいいだろ？」

「構わんぞ」

「ありがとうございます！！」

その少女は「セリア・オルセイーン」と名乗った。どうやら見習い魔法使いのようだ。

そして、彼女の師匠に「旅をしなさい。見聞を広めることも大切です」と言われたそうだ。

「あの、よかつたら名前を教えてくださいませんか？」

「俺は阿良木渚」

「僕はクロノです。クロノ・ノワール」

「私は神崎静香だよ」

「リリイ・レオンハルトだ」

「ゆ、ユリウス・ラファイエです」

セリアはユリウスの名前を聞いた途端、驚愕の表情を浮かべた。

「ゆ、ユリウスさんでしたか!!」

「知り合いか？」

「い、いえ……」

「ユリウスさんは魔法使いの間では、有名なのです!!」

「そうなのか？」

「は、初耳です」

「三大魔術師の一人って言われてますよ？」

「さ、三大魔術師ですか!？」

「そうですね!!まさか、こんな所で会えるとは」

「その中に私が入っていたんですか……」

ユリウスが有名だって事は、俺達も初耳だった。

以降、ユリウスに対する見方が少々変わったのは、俺だけではないだろう。

事件が起きたのは、リスディアを出て三日目の昼だった。

「ありゃあ、魔物じゃねえか!！」

依頼主の声に、俺達は荷馬車から出ようとした。が、セリアに止められた。

「私に任せてください!! 転移させますから!!」

「そんなことできるのか」

「はい、魔法の中でも、得意な方ですから」

そう言うと、セリアは呪文を唱え出した。

しかし、何故か俺はそれを聞いていると、嫌な予感がして来たのだった。

「テレポート!！」

セリアが唱え終えた瞬間、俺の足元がグニヤリと歪んだ。

「あああああつ、ミスしちゃったあああああ！！」

「な、なんだとおおおおお！？」

俺の近くにいたのは、セリアだけだった。

結果、セリアを巻き込んで、俺は暗闇に落ちて行ったのだった。…

…なんかデジャブ。

「渚あああああ！！？」

クロノの呼ぶ声が聞こえたが、返事しようとした時、俺の意識は遠く彼方に消え去ってしまった。

気が付くと、そこは何処かの洞窟のようだった。

「いてててて……」

「ぎゅー……」

俺の近くで伸びているセリア。

「ったく、なんなんだよ……」

俺は立ち上がり、辺りを見渡した。

すると、岩で出来た台に目が付いた。

「なんだあれ？」

正確には、台の上の腕輪だった。銀色の細身の腕輪が、宙に浮いていた。

俺はそれに近づき、じっくりと眺めてみた。

「なんで、宙に浮いてんだ？」

俺は思わず手を伸ばし、触ってしまった。

その途端、腕輪はまるで何かの生き物のように動き、俺の手首にはまった。

「うおっ！？なんだ、取れねえ！！！」

『これを外したければ、四人の精霊の力を借りろ』

頭に直接響いてきた、低くしわがれた声。

「四人の精霊？」

『風の精霊、土の精霊、火の精霊、水の精霊だ』

「なんで、そんなことしないと」

『外さなければ、七日後、お前は死ぬぞ』

「いけないのかよおおおおおおお！！！」

『まずは、ここから西の森に行き、風の精霊に会いに行け』

「なに、教えてくれんの？」

『最初だけだ。後は知らん』

「上等だ！！急がんと……」

それきり声は聞こえなくなった。

俺は急いで、洞窟を抜けることにしたかった。

が、セリアが気絶したまま、動かなかった。……自分でやっておきながら。

結局、洞窟を出るまで、俺が担ぐ事になったのだった。

しかし、めんどくさいことになったなあ……。……。

旅のお供は、ドジツ娘魔法使い！？（後書き）

キャラ説明

セリア・オルセイン（15）

見習い魔法使い。暴発が多く、彼女の師匠も大変困っていた。そこで、セリアは旅に出させられたのだった。

師匠も投げ出したわけではなく、旅で学ぶことが多いから、旅に出した。

しかし、早速、渚を巻き込み、別の場所に転移したのだった。身長は145。ショート茶髪で赤色の目をしている。

しばらく、渚とセリアだけしか出てきません。

渚をさらに、チート化させる章ですので、あしからず。

ではでは、感想バツチコオオイー！！

風の精霊、ジン 前編！？

『西の森に向かえ』

俺達に与えられた手がかりは、それだけ。

「西の森、ですか？」

「ああ」

セリアと俺は、現在西に向かって歩き続けている。

「精霊がいる森……」

「どうかしたのか？」

セリアは唸っていた。

「たぶんなんですけど、その森って『妖精の森』ですよ。あと、ここはデフヨル近郊ですね」

「『妖精の森』？」

「はい、エルフとかフェアリーが住んでいる森の事です」

「なんでそんなこと言えるんだ？」

「昔読んだ本に、そう書いてあったような気がするんです」

エルフとフェアリーか……。

「エルフとフェアリーは、基本何もしてきませんよ。こちらが何もしなければ」

「そうなのか？」
「はい」

そんな話をしながら歩き続け、丸一日。
ようやく、それらしき森に着いたのだった。

「ここか」

「そのようですね」

「じゃあ、早速行こうぜ」

「はい!!--」

そして、妖精の森に足を踏み入れたのだった。

しばらく、俺達は森の奥に進んで行った。
すると、突然、女性が木の陰から飛び出してきた。

「あなたたち、ここが何処だか知ってるの?」

「いや、風の精霊に会いに来ただけだ」

「ジン様に？なんで？」
「これ」

俺は女性に、手首についている腕輪を見せた。

「腕輪？それがどうしたの？」

「これを外すために、四精霊に会いに行かなきゃならんだ」

「確かになんだか、呪いじみたものを感じるわね」

「だから、ここに来たの」

「そう、わかつたわ。でも、ジン様に会うんなら、それなりの力が無いとダメよ？」

「なんで？」

「ジン様は、強力な力を持つてるわ。弱い者が近づいたら、あっという間にあの世行きよ」

な、なんと。そんなすごい奴に会いに行くのか。

「そういうわけで、私が相手してあげる」

「どどういうわけだ！！」

「私はこの森の中で、ジン様の次に強いわ。……ジン様の足元にも及ばないけど」

「だから、お前を倒せば少なくとも、簡単に死ぬことは無いと？」

「ええ。私はティル。エルフよ」

なるほど。エルフだったのね、この人。

「セリア、下がってる」

「は、はい」

「間違っても、魔術は使うなよ？」

「わ、わかってます」

そう言うと、セリアは後ろの方に下がって行った。

「名前を聞いてもいいかしら？」

「阿良木渚だ」

「ナギサね。準備はいいかしら？」

「ああ」

「じゃあ、行くわよ！！」

テイルは腰から短刀を抜き、飛びかかってきた。

「ヤアツ！！」

鋭い掛け声と共に、短刀は寸分の狂いもなく、俺の首に迫ってきた。

「ほっ！！」

俺は、それを半歩下がり、ギリギリで避け、カウンター気味にハイキックを放つ。

しかし、テイルはそれをしゃがんで避け、飛び上がりながら、短刀を俺の顎に叩き込んできた。

「甘い」

「え！？」

俺は短剣の剣腹を手で弾いて軌道をずらし、宙に浮いているテイルの腹にタツクルを軽くかまし、そのまま組み敷いた。

「きゃ！！」

「動くな」

俺はティルの短刀を奪い取って、首に当ててやった。

「そ、そんな……こんなに簡単に負けるなんて……」
「相手が悪かったな」

俺は、ティルの上からのき、助け起こした。

「まあ、これだけ強ければ、大丈夫かしら」

「ほれ、短刀」

「ありがとう」

しかし、あの短刀、見かけによらず重かった。

体重を乗せれば、簡単には弾かれないだろうな……。

「じゃあ、私がジン様の所まで、連れて行ってあげる」

「いいの？」

「いいわよ、暇だったし」

「暇だったから、俺にちよっかい出したのか」

「だって、人がここに来ることって全然なかったし、いいじゃない」

「ま、別にいいんだけどよ」

「渚さん……」

「おお、セリア。どうした？」

セリアが木の陰から、恨みがましい声音で話しかけてきた。

「私の事、忘れてたんじゃないですか？」

「あ、うん、ごめん」

「あっさり言われた!？」

「いや、隠しても仕方ねえだろ？」

「聞かれても困ります!！」

「ほら、行くわよ」

「ああ。セリアも来いよ」

「……はあい」

こうして、俺達はテイルに連れられ、風の精霊、ジンのもとに向かうのだった。

風の精霊、ジン 前編！？（後書き）

次回、ジンが登場！！

感想バツチコオオオオイイイイ！！

風の精霊、ジン 後編！？

俺達は、ティルに連れられ森の奥に来ていた。

「着いたわ」

「…………どこにいるんだ？」

辺りを見渡しても、それらしき影は無かった。

「ジン様、起きてください」

ティルが突然、そんなことを言い出した。
そして、何かと会話しだした。

「ううん…………」

「ジン様、お客ですよ。人間の」

「ん？…………人間？」

その時、一陣の風が俺達の間を駆け抜けた。

「な、なんだ？」

「ナギサ、あの方がジン様よ」

ティルが指差す方を見ると、宙に小さな女の子がふわふわと浮いていた。

「ティル、お客ってこの人？」

「そうです」
「へえー、面白そう」

そう言うと、女の子はこちらに向かって、腕を振ってきた。

「!？」

「きゃっ!？」

俺はほとんど直感で、セリアを押し倒し、地面に倒れこんだ。すると、俺達がいた場所の後ろの木に、深い切り傷が付いた。

「おお、あの人達避けたよ、ティル!!」

「避けられなかったら、どうするつもりだったんですか……」

「その時は、その時だよー」

「あ、あぶねえだろ!!」

「ごめんごめん。でも、なんで避けれたの？」

「感だ」

「な、なんという」

「すごいねえ」

本当に危ない奴だ。ティルなんて比じゃないな。

「とりあえず、これを外すために、力を貸してくれ」

俺は本題に入るため、腕輪を見せた。

「あ、コレ……」

「どうかしたか？」

「私達が、遊び半分で作ったヤツだ」

「は？」

「で、結局、遊びで作った癖に、外さなかつたら死ぬってのは、本当なのか」

「うん……ごめんなさい」

ジンにちょっとばかり説教をしたので、しょんぼりしている。

「まあいい。とりあえず俺は、一刻も早くこの腕輪を外したい」

「じゃあ、私がナギサに力を貸せばいいのね!!」

「具体的には、どうするんだ？」

「私がナギサの中に入るの。それだけ」

「入る？」

「宿るって感じかな？」

「なるほど」

そこまで言うと、ジンは俺の胸に手を置いてきた。

「じゃあ、早速……」

「……」

お互いに目を閉じた。

すると、頭の中に、ジンが出て来た。そして、力が体の奥底から湧き上がってくるのを感じた。

「すげ」

『でしょでしょ?』

「おう」

「ジン様、ナギサについていくのですか？」

『うん。しばらくの間、ここをお願いね』

「はいっ……!」

『じゃあ、早く次にいこ、ナギサ』

「ああ、行くぞセリア」

「また、忘れられていた……」

セリアはなんだか意味不明なことを、ぶつぶつ言っていたのだった。

風の精霊、ジン 後編！？（後書き）

キャラ紹介

ジン（10972）

精霊なので、歳は異常。

身長は45cm。

昔いた風の精霊達は、一昔前の魔物と人間の戦いに巻き込まれ、死んだ。

ほかの火、水、土の精霊たちも、一人残し、全員死んだのだった。

そしてその四人が出会い、しばらくして腕輪を作ったのだった。髪は足先まであり、薄い黄緑。

こんな感じ。次は火の精霊に会いに行きます。

感想バツチコオオオイイ！！

火の精霊、ヒイロ 前編！？

ジンと共に森を出て、俺達は東の火山に向かっていった。
今ジンは、表に出てきていた。

「火の精霊か」

「そうだよ。ヒイロはちょっと戦闘狂っぽいけど」

「マジかよ」

「私の力を使えば、大丈夫だよ！！」

「いや、火に風って、逆にひどくならないか……」

「そうですね……」

俺達のジンに対する認識は、馬鹿、その一言だった。

「でも、ジンの力ってどういう風に使えばいいんだ？」

「魔術を使うみたいにですかね？」

「具体的なイメージを持てばいいよ」

「イメージ？」

「例えば、剣を飛ばすイメージを持って、念じればいいんだよ」

「うーん？」

「やってみればいいよ」

俺は早速、頭の中で近くにある岩に、ナイフを投擲するのをイメージした。

すると風が生まれ、岩に亀裂が入った。

「おお」

「すごいですね……。魔術より強力ですね」

「ね、ね？すごいでしょ？」

「イメージが具体的になるほど、強い力が使えるのか」

「うんっ、そうだよ！！」

俺は昔、友人がしていたゲームに出て来た最高位の風魔法を、同じ岩に向かってイメージした。

ドゴオオン！！

岩が粉々に砕け、吹き飛んだのだった。

「おお、こんなのもできるのか。確か『神の息吹』だったかな」

「す、すごい、ナギサー！！」

「い、今のはすごいですね……」

今ので大体コツはつかめた。

こうして、俺はまた新たな力を手に入れたのだった。

森を出て二日。

ようやく火山に着いたのだった。

「ジン、火の精霊はどこにいるんだ？」

「火口だよ」

「マジか、熱くなるな」

「そうですね……」

「私はナギサの中にいればいいもんねー」

勝ち誇ったように言うジン。

だが、俺の体温が上がれば、ジンも暑くなるんじゃない？

「そつだ、俺達が風をまたとえばいいんじゃない？」

「え？」

俺は風を身に纏うイメージをした。

すると、心地よい風が、周囲に吹き出した。

「おお、いいねえ」

「すごい発想力ですね」

「さすがナギサだね！！」

こうして、俺達は火口を目指して、火山を登りだしたのだった。

火の精霊、ヒイロ 前編！？（後書き）

次回、ヒイロが登場！！

感想バツチコオオイ！！

火の精霊、ヒロ 後編！？

火口を目指し、火山に登りだした俺達を待ち受けていたのは、サラマンダーという魔物だった。

見た目は、トカゲをデカくしたような感じで、火を吐いている。

「フシユーー！！」

「あーはいはい、邪魔しないから、ここを通せー。さもないと、ぶった斬るぞー？」

「フシヤーーー！！」

「あら、逆に刺激しちゃったか」

サラマンダーは、飛びかかってきた。

「フシヤーーー！！」

「よっー！！」

それに合して、俺の右ストレートがきまる。

「フシユウウ……」

一撃で、サラマンダーは力の差を知って、逃げ去ったようだ。

落ち着いたところで、俺は前から気になっていたことを、ジンに聞いたのだった。

「ジン、ヒロってのは火口のどこにいるんだ？」

「んー、基本はマグマの中だよ」

「は、はいねえ……」

「でも、呼べば向こうから出てきてくれるよ」

「そうなのか？お前、呼んでくれよ？」

「オッケーだよ」

「セリア、今回はジンと一緒にいるよ」

「あ、はい。……なんだか、どンドン扱いがひどくなってるような……」

「何言ってるんだ？」

「いえ、何も」

「そうか」

火口に着くまで、セリアはブツブツと意味不明なことを呟き続けていたのだった。

「ここか……」

ようやく火口に着いた。が、火口というものは、予想以上に熱い。風を纏っていても、相当な熱が伝わってきた。

「熱い……」

「熱いですね……」

「久しぶりに来たけど、こんなに熱かったっけ……?」

同じ反応をしていると、火口から小さな男の子が浮き上がってきた。

「なんだ、お前ら?」

「あ、ヒーロー、ジンだよー!!」

「あ?ジン?……おお、ジンじゃねえか」

そう言ってヒーローは俺に近づいてきた。

「いや、俺じゃないから」

「あ?誰だ、てめえ?」

「ナギサだよ!!私達で作った腕輪に引っかけた人だよ!!」

「腕輪って、マジでか!?!」

おい、なんだその、馬鹿を見るような目は?

「んじゃ、俺にも力を借りに来たってわけか」

「ああ」

「じゃ、俺と戦って力を示せよ」

そういうと、ヒーローは火球を吐き出してきた。

「ちっ!!」

俺は咄嗟に刀を抜き、風を纏わせ鋭く放ち、火球を切断した。そして、もう一本を抜きざまに、同じようにして、ヒイロに向かって放つ。

「ひゃっはははっはははは!!!!!!おもしれえ!!!!!!」

ヒイロはそれを避け、獅子をかたどった火を吐き出してきた。俺もそれに対抗し、フェンをイメージして、風を放った。

その二つはぶつかり合った時、轟音と共に、打ち消し合った。そして、熱風が吹き荒れ、俺とヒイロは距離を取り合わざるおえなくなつた。

「おもしれえ、おもしれえぞ!!ナギサ!!」

「戦闘狂つてのは、本当なんだな……」

俺達はその後しばらく、力をぶつけ合ったのだった。

「はあ、はあ、はあ」

「ふう、疲れたぜ……」

お互いに大きな力を使い、疲れ果てて、攻撃をやめたのだった。

「気に入った！！ナギサ、お前に力を貸そう！！」

「そ、そうか……」

「面白い奴にあたってくれてよかったぜ」

「そりゃどうも」

こうして、火の精霊であるヒイロの力を手に入れたのだった。

「ジンさん」

「ん？なあに？」

「私、扱いひどくないですか？」

「仕方ないよ」

「そんな簡単に済ませないでくださいよ……」

後ろの方で、セリアが鬱になっているのは、気にしない方向で。

火の精霊、ヒイロ 後編！？（後書き）

キャラ紹介

ヒイロ（10972）

精霊なので、歳は異常。

身長は48cm。目が悪い。

髪は短く真っ赤で、瞳も赤い。

こんな感じ。

感想バツチコオオオイイイ！！

俺と精霊と、ときどきセリア!?

俺達は、ヒイロと共に火山を降りて、水の精霊に会いに行くことにした。

が、ヒイロと戦っていた時間が長く、すぐに野宿をすることになった。

「さて、こちら辺でいいだろ」

「ああ、そうだな」

「そうだねえ」

「じゃあ、テントを張りましょうか」

「そうだな」

テント設営中

「ふう、終わったな」

「飯飯ー!!!」

「飯飯ー!!!」

突然、精霊二人が騒ぎ出した。

「うるせえな」

「飯飯ー!!!」

「飯飯ー!!!」

「わかったから、少し待ってる」

セリアには山菜を採って来てもらい、俺は保存食の干し肉に手を加え、採って来てもらった山菜と合わせ、味を調え終えた。

「ほら、できたぞ」

「おおー!!」

「おおっ!!」

「すごいですね」

三者三様の反応を見せ、俺達は飯を食ったのだった。

「おお、うまいぞー!!」

「うまいぞー!!」

「おいしい!!」

「そりゃよかった」

なかなかの好評を受けた、俺の即興料理。

しばらくして、セリアが話しかけてきた。

「私、魔術師の才能、無いんですかね……?」

「才能なんて無くても変わらん。ようは、努力だ」

「そうなんですかね……」

「自分で言うのもなんだが、血の滲むような努力をして来た」

「そうなんですか?」

「ああ。あとは、コツだな」

「コツ、ですか?」

「ああ、努力をしていると気付ける」

「努力……」

「才能なんて、気付くまでの時間が短くなるだけだ」

そこまで言い切ると、俺は遊んでいた精霊二人を呼んだ。

「お前ら、魔術に関して、なんか知ってるか?」

「そうだねえ……」

「昔は魔術師なんていなかったんだぜ?」

それは意外というか……。

「じゃあ、代わりに何がいたんだ?」

「『精霊使い』だよ。精霊と契約して、力を使うの」

「普通は一属性としか契約できないんだが、まれにナギサみたいに、多くの属性と契約できる奴がいる」

「今じゃ、五千年前の大戦のせいで、精霊は火、水、風、土、光、闇の六人しかないの」

「それで、人間が開発したのが、魔術」

「開発したもののなか?」

「ああ。魔術は精霊が死んだ時、周囲にまき散らす力を、人間に移したのが始まりだった」

「それで、代を重ねることに、最初から魔力が備わるようになったんだよ」

「っーか、お前ら、かなりの年なのな」

「それは置いといて、魔術は昔の名残からか、使う場所によって威力が変わってくるの」

「例えば、森の中や草原で風属性の魔法を使えば、威力が強くなる」

「じゃあ、水辺で水属性を使えば、強くなると？」

「ああ、そうだな。だから、魔術を使い始める時は、できるだけ自然の中でした方がいい」

「だとよ、セリア」

セリアは真剣に聞いていたようだった。

俺が声を掛けた時、派手に驚いた。

「えっ!! な、なんですか？」

「それじゃ、早速やってみようぜ？」

「い、今からですか？」

「魔術を使えるようになりたいんだろ？」

「は、はいっ!!」

そして、セリアの魔術特訓が始まったのだった。

「セリア、いい？イメージするんだよ？」

「は、はい」

「息を整えろよ？」

「いくよ？」

「は、はい！！」

ヒュンッ！！

俺の近くを風の刃が通り過ぎた。

「いい感じだぞ、セリア」

「本当ですか！？」

セリアの成長は目を見張るものだった。
もともと才能があったのだろう。

特訓を始めてから、三時間。セリアは力を制御できるようになっていた。

「今日はこのぐらいにしておこう」

「もう、遅いもんね」

「そうだな、明日は水の精霊だったな」

「ありがとうございます！！」

こうして、魔術特訓は明日の夜に、もう一度行われることになった。

俺と精霊と、ときどきセリア!? (後書き)

「あれ? 題名ほど、私が空気じゃない」

「さっきからどうした?」

「いえ、なんでもありません」

次は水の精霊、アクアが出てきます。

感想、バツチコオオオイイイ!!

俺がキレている間に、ジン達が状況説明をしてくれていた。

「じゃあー、ナギサは力を借りに来たんだねー？」

「そう言ってるんだろうが」

「なら私と戦って力を見せてねー」

「分かってる」

俺は刀を一本だけ抜いた。

そして、構えた俺を見て、アクアはいきなり水龍を生み出し、俺に突進させてきた。

「いきなりかよ!？」

俺は瞬時に火龍を生み出し、水龍にぶつめた。

すると、水蒸気を大量にまき散らし、龍達は消えた。

「今のに反応できるって、すごいんだねー」

「今度はこつちからだ!!」

俺は火球を大量に宙に浮かせ、一斉に降らした。

アクアもそれに対抗し、水球を湖から大量に飛ばしだした。

俺はその隙を狙い、アクア目掛けて風の刃を飛ばした。

「危ないなあー」

まったく風の刃には見向きもせず、火球と共に打ち消した。

「こんなものなのかなー、ってあれ？」

アクアには俺が消えたように見えたことだろう。

俺はアクアが打ち消すのに専念している間に、アクアの後ろに回り込んでいた。

もちろん、水の上に立って。

「阿良木流 百足・改」

「な、なんで水の上に立ってるのー!？」

俺は刀を突き付け、アクアの疑問に答えてやった。

「足の裏から風を出してるだけだぜ？元は気を出すんだっただけな」

「は、反則だよー!!」

「うるせえ!!勝負にルールなんてねえんだよ!!」

「うー!!」

「ああん!？」

ちよつとの間、俺達は睨み合っていた。

が、すぐにアクアが降参した。

「わかったよー、私の負けだよー」

「ふう、疲れたぜ」

俺達は陸に上がり、セリア達のもとに向かったのだった。

「これで、オツケーだよー」
「おし、後は土の精霊だけだな」

俺とアクアは契約を終え、湖を後にした。
次に向かうのはこの近くの砂漠だった。

「よく考えると、ここら辺って変だよな」

「どうしたんですか？」

「だって、火山と森と湖と砂漠が近くにあるんだぜ？」

「そういえば……」

「だろ？」

「それは、昔の名残だよ」

「名残？」

「ああ、言っただろ？昔は精霊が多くいたって」

「ああ、そうだな」

「昔、精霊はこの地域にしかいなかったんだ。だから、その精霊
にあった地形に変わっていったんだ。その結果がこれだ」

「なるほど。でも、お互いの環境が干渉はしないのか？」

「そういうこともあったが、いかんせん、それぞれ一人しかいなくな
ったからな。まったく無くなってしまうたな」

「そうなのか」

火山があれだけ熱かったということは、砂漠もかなりリアルな造りになってるのか……。

そして、砂漠に入ったのが、五日目の夜だった。

水の精霊、アクア！？（後書き）

キャラ説明

アクア（10972）

精霊なので、歳は異常。

身長は43cm。語尾が伸びる。

髪は青く、腰のあたりまである。

こんな感じ。

今回は、土の精霊、ソイルがでてきます。

感想バツチコオオオイイ！！

土の精霊、ソイル 前編！？（前書き）

久しぶりの更新ですねー

土の精霊、ソイル 前編！？

六日目の朝。

俺達は、砂漠のど真ん中を歩いてきた。

「あぢいいい〜」……」

「干からびるう〜」……」

アクアがふらふらしている。

「大丈夫か……？」

「だめだよ〜」……」

アクアは、突然消えた。

「？」

『中で休ませてもらうよー』

「わかった」

「渚さん、何処に向かっているんですか、これ……」

セリアも同じように、ふらふらしている。

「遺跡があるらしいんだが……」

「そこに、ソイルはいるんだぜ」

「お前は元気なんだな……」

ヒイロは熱さをものともせず、元気そのもの。

「お、見えて来たぜー」
「……何も無いぞ？」

ヒロの視線の先には、何も無い。

「そんなことないぞー。ほら、川が。あれは、親父か……」
「だめっ！！その川は渡っちゃだめええええ！！」

俺の目の前で、ジンとヒロが三文芝居を繰り広げている。

「だあああああ！！！！鬱陶しいから、俺の中に入ってろおおおおお
お！！！！！！」
「はいいいいい！！！！」

二人はいい返事を残し、俺の中に消えて行った。

そんなことがあってから、小一時間。
前方にピラミッドらしきものが目に入った。

「あれだな」

「そのようですね」

俺達は早速、その中に入って行っただった。

中は涼しく、洞窟のようなジメジメした雰囲気は無い。

「意外ときれいだな」

『ソイルは綺麗好きだから』

ジンの声が聞こえた。

「そうなのか？」

『ああ、気味が悪いほどに几帳面でな』

『だってー、私物が少し動いてるのにすぐ気が付くんだよー』

これはまた、癖のある奴のような気がするな……。

「セリア、大丈夫か？」

「はい、ちよつと暗い所が苦手なだけで……」

セリアは壁伝いに歩いている。

「しかし、迷いそうだな」

迷路みたいに道が入り組んでいるため、もうすでに帰り方が分からなくなってしまうた。

『直感だ、直感』

『考えるな、感じるー』

『そつだそつだ！ー！』

俺の中では、三バカが騒いでいる。

結局、俺達はしばらくの間、ただ歩き続けたのだった。

土の精霊、ソイル 前編！？（後書き）

お久しぶりです

次には、ソイルを出したいと思います。

それでは、感想バッチコオオオイイ！！

土の精霊、ソイル 後編！？（前書き）

お金の価値が、いまいちはっきりしてなかったので、改めて決めておきたいと思います。

銅貨一枚〓百円

銀貨一枚〓五万

金貨一枚〓……二十五億かな？

白金貨一枚〓……計算があああああああ！！！！！！！！！！

土の精霊、ソイル 後編！？

俺達はようやく、遺跡の中心部と思われる開けた場所にたどり着いた。

「お、ここっぽいな」

「そうですね」

「でもなんでここだけ、明るいんだ？」

そう、中心部のはずなのに、昼の森の中みたいな明るさなのだ。

「それはねえ、色んな植物が生えてるでしょー？」

突然、三バカ達が出てきた。

「ああ、それが？」

「それが、微弱だが発光してんだよ」

「……よく見りゃそうだな」

「星花とか、月ゴケとか、ほかにもいっぱいあるよ」

「すごいですね。星花と月ゴケって薬草ですよ」

「ほー、すげえんだな」

そんな感じで談笑していると、俺の足元が盛り上がった。

「おおっ！？」

『さっきからうるさいなあ』

「どっから声が！？」

「と、とりあえず降りた方が!？」

セリアと俺だけが焦っている。

三バカは特に驚くことも無く、その盛り上がった土に向かって話しかけた。

「久しぶりだな」

『その声は、ヒイロだね』

「私達もいるよー」

『ジンとアクアも、どうしたの?』

「腕輪の事、覚えてる?」

『腕輪?あの洞窟に入れたヤツだよね』

「そう、それだ」

「あれに引つかかった人がいてねー」

『あれに?誰、そのバカは』

「バカとはなんだ、ごらああ!!」

「な、渚さん、落ち着いて!!」

『聞き覚えのない声だね』

「そりゃそうだろうよ、そのバカが俺だからな!!」

そう言うと、盛り上がった土からソイルと思える奴が出て来た。

「へー、君がねえー」

「あんだよ、文句あんのか?」

「いやいや、腕輪を見つけたのが君でよかったよ」

「どういう意味だよ」

「いや、変な意味じゃないよ」

「?」

「僕達が力を貸す人なんだ。強い人じゃないとね」

俺を見ただけで、そんなことを言うてくる。
すると精霊達だけで話し始めた。

「見ただけで、わかるのー？」

「うん、この人は強い。安心して力を貸せるよ」

「確認しなくて、大丈夫なのか？」

「だって、君達が力を貸してるんだから、改めて僕が確認する必要
ないでしょ」

そこで、ソイルは俺に向き直った。

「というわけで、よろしくね。えーと……」

「渚だ。よろしくな、ソイル」

「ナギサね。よろしく」

こうして、ソイルとの契約も済ますことができた。

「よし、これでいいはずだよ」

ソイルとの契約が済んだ瞬間、俺の手首と腕輪の間に隙間ができ、取り外すことができた。すると無地だった銀の腕輪に、模様が描かれ、内側には文字がほられていた。

「なんて書いてんだ？」

「どれですか？」

「これだ」

「これ、古代文字ですよ」

セリアに見せると、読み上げてくれた。

「『汝の未来に幸あらんことを』ですね」

「なんだそりゃ」

「昔の名残だよ」

「名残？」

「うん。昔、精霊と契約を終えた証に、腕輪を送っていたんだ」

「へえー」

「それに必ず、『汝の未来に幸あらんことを』ってほるんだよ」

「そうなのか」

「さて、それよりここを出よう」

「そうだな。つっても、どうやって出るんだ？」

ここに来るまでの道は、もう覚えていない。

「それなら大丈夫だよ。ほら、こっちに来て」

ソイルの後について、俺達は歩いて行った。

すると、俺達が来た通路と反対側の通路の突き当りに、壁画があった。

「ここを押すと……」

そう言って、ソイルは壁画の絵の一部を押した。すると、壁画が動き、階段が出て来た。

「これを上げれば、地上に出れるよ」

「ほー、便利なんだな」

「まあね」

こうして、俺は腕輪を外すことができ、地上に出れるのだった。

土の精霊、ソイル 後編!? (後書き)

キャラ説明

ソイル (10972)

精霊なので、歳は異常。

身長は46cm。四人のまとめ役。一番常識がある。

髪は茶色で、目が隠れている。

こんな感じ。

次回で四精霊編、終わりです。……たぶん。

感想バツチコオオイイイ!!

合流、そして動く影!?(前書き)

旅行から帰ってきたら、累計ユニークが100000を超えました

本当にありがとうございます!!

合流、そして動く影!?

俺達は砂漠から出て、デフォルを目指していた。

「しかし、デフォルに近い所でよかったな」

「そ、そのことは、本当にすいませんでした……」

「気にすんな、こいつらと会えたわけだし」

「そう言ってもらえると嬉しいね」

今、表に出てきているのは、ソイルだけである。

あとの奴らは、俺の中で寝ている。

「でも、ナギサ」

「ん？」

「ナギサの仲間は心配してないの？」

「たぶんしてんだろうな。特に、静香とか」

「急いの方がいいんじゃない？」

「そうだな……」

「なら、これで急ごう」

ソイルがそう言うと、土が盛り上がり、そこに翼を広げた大鷲が作られた。

「これ、動くのか？」

「うん、結構頑丈だよ」

突然、大鷲が鳴き出し、翼を折りたたんだ。

「こりゃあ、すげえな」

「そ、そうですね……」

「じゃ、行こうか……!」

そうして、俺達は大鷲に乗って、デフォルムに向かったのだった。

side クロノ

まったく……。

渚がいなくなってから、もう一週間経っている。

「はあ………」

渚がいないと、あのフェンですら元気がない。
静香さん達は言うまでもなく……。

「渚、早く帰って来てよ………」

でないと、この重い空気にやられてしまう……！！

「……とりあえず、デフォルに着いたもの………」

さっきデフォルに着いたのだが、まったく会話が
ない。暗すぎる……。

「はあ………」

フエンが渚に飛び込んで行った。

「おー、よしよし。久しぶりだな」

「」

フエンが目に見えて喜んでいるのが分かる。

「ナギイイ!!」

続いて静香さんが、飛び込んで行った。

「おおっ!?!どうした?」

「よかった……安心した……」

「……悪かったな、心配かけて」

「……いいよ」

すごい、いい雰囲気醸し出してる気がする。

「とりあえず、離れてくれないか?ちょっとキマってる……」

「ああ、ごめん!」

慌てて、静香さんが離れた。

「それで渚。この一週間どうしてたの?」

「精霊と仲良くなった」

「は?」

「まあ、見りゃ分かる」

そう言っと、渚はブツブツ小さい声で何か言い出した。

s
i
d
e

o
u
t

「……ちよつといいか」

『なに〜』

『なんだ？』

『どうしたの？』

「出てきてくれるか？こいつらに説明したい」

『分かった』

『りよ〜かい』

『おっけー』

そして、もともと出ていたソイルを合わせて、四人の精霊が俺の目の前に現れた。

「こいつらだ」

「この四人が精霊？」

「こんなにかわいいのに？」

「確かに、小さいですね」

「しかし、強い力を感じる」

リリイも復活して、四人をまじまじと見ている。

「は、恥ずかしいよ〜ナギサ〜」

「こんなにまじまじと見つめられるのは、初めてだな」

「まあ、仕方ないよ。僕らって珍しいんだよ、それだけ」

「ううー、恥ずかしい」

ソイル以外は驚いているようだ。

「まあ、掻い摘んで話すとだな……」

そして俺は、今までの経緯を話したのだった。

s i d e ?

渚達から少し離れた物陰に、不審な四人がいた。

「へえ、あれがカーズ様ご執着の男ねえ……」

「いい男だわ……食べたくなるくらい」

「気味ワリなんだよ、バカ」

「落ち着いてくださいよ？こんな所で騒ぎを起こしたら……わかつてますよね？」

「チツ、わかってるよ」

「ふふっ、頑張るわ」

「でも、なんか見たことあるねえ、あの男」

「そうですね……言われてみると確かに」

「んな事どうでもいいんだよ。さっさと帰ろっぜ。今はなんもできねえんだろ？」

「そうね、珍しく意見が合うわ」

「早く帰って寝たいね」

「分かりました、そうしましょう」

そう言うと、次々消えて行った。

「いずれまた、挨拶をしに行きますよ。」

阿良木渚さん……」

合流、そして動く影！？（後書き）

はい、壮絶なフラグを立てておきました。

今回で、四精霊編は終わりです。

ということので、次回はキャラ設定のおさらいをしておきたいと思
います。

……主に自分のために。

感想バッチコオオオイイ！！

某格ゲー風キャラ紹介！？（前書き）

メインキャラのみ、設定のおさらいを

精霊たちは、もうちょっとあとにできたらしよっと思ひます。

某格ゲー風キャラ紹介!?

阿良木渚 17 (CV:岡本信彦)

戦闘スタイル:阿良木流二刀技

阿良木流一刀技

阿良木流体術

我流戦闘術(四精霊の力と阿良木流を混ぜたもの)

身長 :180

体重 :61

血液型 :B

出身地 :日本

誕生日 :4月21日

趣味 :筋トレ

家事全般

大切なもの :仲間

嫌いなもの :仲間を傷つけるもの

・性格

冷静に状況判断することができ、全力で今を楽しむ事をモットーとしていいる。

面倒事は基本避けるが、状況判断した上で関わることもある。

仲間が傷つくことや、危険に晒された場合のみ、冷静でいられなくなる。

神崎静香 17 (CV:竹達彩菜)

戦闘スタイル:弓

身長 : 158

体重 : 48

血液型 : A B

出身地 : 日本

誕生日 : 5月17日

趣味 : なんでも暗記

読書

大切なもの : 仲間

昔の思い出

渚からもらったネックレス

嫌いなもの : 辛い物

自分の非力さ

・性格

非常に明るく、周囲の人間も元気づける。

自分の非力さがとても嫌いで、仲間を守るほど強くなりたいと思っ
ている。

胸のなさを指摘されると、ブチ切れる。 渚でも手を付けにくい

ほど

ユリウス・ラファイエ 16 (CV:生天目仁美)

戦闘スタイル：魔術

身長 …… 152

体重 …… 47

血液型 …… O

出身地 …… ラファイエ

誕生日 …… 12月12日

趣味 …… 景色を眺めること

大切なもの …… 人との絆

嫌いなもの …… 怖い人

・性格

人見知りが激しく、すぐに自分のせいだと思っ癖がある。

他人から褒められることに慣れていなく、褒められると赤面することも。

困っている人を見ると助けたくなる。

クロノ・ノワール 15

(CV：神谷浩史)

戦闘スタイル：狙撃

銃術術

身長 …… 172

体重 …… 58

血液型 …… A

出身地 …… マスヴィア

誕生日 …… 8月29日

趣味 …… 賭け事

大切なもの : 健康
嫌いなもの : 病気・怪我

・性格

周囲のボケにツッコミを入れまくるといって、けなげな少年。
自分の戦闘力に自信が持てなく、ちょっと女の子と話すのが苦手。
無病息災がモットーである。

リリイ・レオンハルト 17

(CV:伊藤静)

戦闘スタイル: 剣術

魔術

身長 : 167

体重 : 56

血液型 : B

出身地 : リスディア

誕生日 : 10月9日

趣味 : 昼寝

大切なもの : 甘いもの
嫌いなもの : 自分を男扱いするヤツ

・性格

真面目で下に関する知識が全くない。

普段の口調はしっかりしているが、非常事態には口調が変わる。

渚と会うまではバトルジャンキーだったが、渚に負けて少し変わ

つ
た。

某格ゲー風キャラ紹介！？（後書き）

はい、こんな感じです。

書いてて気が付いたけど、リリーの身長とかまったく書いてなかった……

ちなみに、CVは作者のイメージですので、読者様の中にはイメージと違うと思う方もいるかもしれませんが、あくまで参考程度にお考えくださいませ

というわけで、次回から一番大きい章に入りたいですね。

感想バツチコオオオイ！！

別れ、そして出会い!?(前書き)

今回から、新章に入ります

別れ、そして出会い!?

精霊達についての説明が終わる頃には、夕暮れだった。俺が合流した時は、昼だったのにな。

「さて、説明も終わった事だし、宿に行こうぜ」
「そうだね」

そして、俺達が宿に向かおうとした時、セリアが声を掛けてきた。

「あー」

「ん？」

「私は元の様に、一人旅に出ます」

「いつ？」

「今からです」

「へえー、それはまたどうして？」

「渚さんにはとてもお世話になりましたし、元々一人旅のつもりでしたので」

「えーと、セリアさん、だったよね？」

「はい」

「今からじゃなくてもいいんじゃない？」

「いえ、これ以上迷惑をかけられません。それに、私に必要なのは自立心だと思いますから」

「そうは言っても、もう夕暮れだよ？」

「クロノ、もういいさ。セリアがしたいって言うてんだ。放っておけ」

「渚!」

「ナギ!」

「セリア、一人じゃキツイこともあるだろうが、頑張れよ。お前な

らできるぞ」

「っ……はいつー!!」

「じゃあな、また会おうぜ」

「はい、次会う時までには、一人前になってみせますー!!」

「おう」

「本当にありがとうございました」

そして、セリアは早速ギルドのある方に歩いて行った。

「いいの?」

「何が?」

「何が?じゃなくて、セリアさんの事だよ」

「いいさ、ああいうのは、一度言い出すと梃子でも動かねえよ」

「なんか、渚が言うтусごい納得できないんだけど」

「ああん?どういう意味だ?」

「まんまの意味」

「てめえ、久しぶりに殺されてえようだな……」

「寝言は寝て言いなよ」

「……」

「ナギから黒いオーラが……!!」

「渚さん、怖いです……」

「フ、フ、フハハハハッ!!」

「じゃ、僕はこれで」

「逃がすかああああ!!!!」

この後、クロノがボロボロになったのは言うまでもないだろう。

「ここは、どこ？」

「ここが阿良木の本家だよ」

ほんけ？

「そう、これから君はここで過ごすんだよ」

おとーさんと、おかーさんは？

「心配いらぬよ、しばらく会えないだけだから」

あえないの？

「残念ながらね。君はあのお方の血を、濃く受け継いでいるんだから、仕方ない」

あのおかた？

「そう、君の先祖だよ」

せんぞ？

『ずっと昔の人だよ』

なんてなまえなの？

『阿良木渚。君と同じ名前だよ。まったく世の中不思議なこともあるもんだ』

ぼくとおなじなまえ……

『ああ、君が渚君かい』

は、はい……。

『そう怖がらなくてもいい。私は君の父親になるんだから』

ちちおや？どうして、ちちおやになるの？

『和成さん……！慎二さん達のことば……！』

『おっと、すまん……。つい……』

しんじさんっておとーさんのなまえだよね？おとーさんと、おかーさんがどうかしたの？

『な、なんでもないよ』

うそだよっ……うそっくひとのめ、してるもん……！

『和成さん……』

『あいつらも、この子に隠し事はできないって言ってたな……』
『どうするんですか?』

『仕方ない、本当の事を言っしかあるまい』

ねえってば!!

『でも、それだと……』

『それでダメになったら、それまでだ。ここで暮らす以上、隠し続けるのは無理だ。髪も赤くなってしまっている』

『しかし……』

『こついうことは早い方がいいかもしれん。……こついう状況は初めてだから、よくわからんが』

おとーさんと、おかーさんになにがあったの!?

『君の両親は、死んだ』

え……?

『交通事故で死んだんだ。君だけが無傷で生き残った』

う……そ……だ……

『私の目を見てどう思っ?嘘をついているように見えるかい?』

う……うわあああああ……!!……!!……!!……!!

「うわあああああ!!」

俺は飛び起きた。

「はあ、はあ、はあ……夢か……」

今はまだ、外は暗い。どうやらまだ夜明けまでには、時間がありそう
うだ。

「……久しぶりに見たな、この夢」

こんな夢、見たくもない。思い出したくない。
昔はそう思えば思うほど、夢を見ていた。

「……」

疲れていたんだろっ、きつと。

「もう寝よう……」

俺はもう一度寝ようと、布団をかぶりなおした。

「……………寝れん」

さっきの夢のせいで、目がさえちまった。

「夜風にあたるか」

俺は同部屋のクロノとフェンを起こさないように、宿の外に出た。

外に出ると、街の明かりはことごとく消え、深い闇の中に街灯が等間隔に並んで浮かんでいた。時折吹く涼しい風が、肌を撫で心地よい。

「ふう……」

俺はしばらくその場に立ちつくし、空を見上げていた。

「歩くか」

あてもなくさまようのも悪くない。

俺は、少々おぼつかない足取りで、その場から歩き出した。

「しかし、真っ暗だな……」

今の俺にはちょうどいいが。

「……」

昔は、こんな暗い所、一人で歩けなかったかな……。よく、親父に引っ付いていたっけ……。

「……」

さっきの夢のせいか、昔の事をすぐ思い出す。

「……」

でも、本当の親父達の事がまったく、思い出せない。仕方のないことだとは思う。俺が小一の時だったから。そうであっても、思い出せないことはツライ。

「……」

まったく、俺らしくもないな。過去の事を引きずり過ぎだぞ、渚。

「よし、帰ろう」

「あら、もう帰っちゃうの？」

「!?!」

俺は声が出た方に振り返った。すると、闇の中から、髪長い女が出て来た。

「なんだ？」

俺は注意深く、その女を観察してみた。

紫がかった髪に、碧い眼。

コイツ、気を隠しきれてない。

相当手練れと見た。

「あつたりー!!!私はい、君を食べに来たのだい。阿良木渚君」
「!?!」

どうして俺の名を？

それに、俺が考えていたことが分かっているのか！？

「その通り、私は君の思考を読んでいるわ」

「そうか……」

「そうかって、軽いわね」

「そう驚くことじゃない」

「あら、どうして？」

「親父ができるからな」

「これは、予想外の切り返しだわ……」

なんだかちよっと驚いているようだ。

「それより、なんで俺の名前を知っている」

「それはあ、あなたに一目惚れしちゃったから？」

「嘘つけ」

「ああん、ひどーい！ー！」

「じゃあいつ、どこで一目惚れしたんだ？」

「昨日、この街でだけど」

「残念だな、俺は今日の昼にここに来た」

「あ」

「簡単にばれてんじゃねえか」

呆れるしかない。

「で、本当に何故知ってる？」

「はあ、もうちよっと遊びたかったんだけどなあ」

「さっさと見え」

「あなたにご執心なのよ、私のご主人様がね」

ご主人様？

「そう、カーズ様よ」

嫌な予感がする。

「今は様子を見ると言われてたんだけどね」

「ならどうして、声を掛けてきた」

「あなたがいい男だから、食べたくなくなっちゃったの」

「は？」

「というわけで、いただきまーっす！！」

突然、女は飛びかかってきた。

「くっ！！」

俺は体をひねり、女を避け、距離をとった。

「いきなりなんだ、てめえ！！」

「ふーん、今の反応できるんだ」

「答える！！」

「さっき言ったでしょ？あ、もしかして、私の名前？」

「それもある」

「私の名前は、カンナよ。カンナ・ミラージュ。カンナって呼んでね？」

「で、どうして俺を襲う」

「スルーなのね……。まあいいわ。私が襲いたいからよ、命令を無視してまでね」

「そんなに俺は価値があるのか？」

「あるわよ、私にとってね」

「あ？どういう意味だ」

「言ったでしょ、一目惚れしたって」

「マジだったのかよ!!!」

「ええ、だから、無理矢理にでも連れて行こうかと」

「何処にだよ!？」

「私のベッドに……ぽっ」

「ぽっ、じゃねええ!!!」

ついつい、敵だとわかっていても突っ込んでしまう。

「いいわあ、その顔。そそられちゃう……!!!」

ダメだ、コイツ!!何かして帰らないと、俺の貞操が危ない!!
こういう時に限って、刀を持ってきてない。

「フフフ……」

「ちっ……。行くぞ、阿良木流百足!!!」

俺は神速でカンナの後ろに回り込んだ。

「甘いわね」

「なっ!？」

カンナはすでに振り返っており、腕が伸びてきていた。

「くっ、阿良木流鳳仙!!!」

「きゃっ」

俺はカンナとの間で気を爆発させて、その爆風で距離をとった。

「やるわね。さらに惚れちゃったわ」

「なんか、何しても無駄な気がする……」

「あら、よくわかるわね」

「認めんなよ!!」

コイツといると疲れる……!!

「うふふ、それが狙い、なんてね」

「黙っとけよ!! 我流龍神!!」

俺は風を纏い、拳に火を灯して殴り掛かった。
もちろん、神速で。

「何度やつても、さっきと一緒よ」

カンナの蹴りが正確に、俺のこめかみに迫って来ていた。

「阿良木流青柳!!」

俺は、腕でガードしつつ、そのまま蹴りをいなし、カンナの軸足を
払った。

「きゃっ!?!」

「はああああ!!!!」

俺はそのまま火の灯った拳を叩き込もうとした。

「そこまですよ。ウロボロス!!」

「!!?!」

そう聞こえた途端、多くの鎖が飛んできた。

「なっ……がっ!!」

俺はなすすべもなく、吹き飛ばされた。

「がはっがはっ!!」

「ダメですねえ、これぐらい避けてもらわないと」

俺は急いで起き上がり、鎖の飛んできた方を見た。

そこには、黒いロングコートを着て、中には黒いベストと黒いタイ、シルバーアクセサリーを大量につけた黒いズボン。

ワイシャツはさすがに白。だが、黒いハットを目深にかぶり、目元が見えない。

緑色の髪が見える程度だ。

「ユウキ!!なんでここに!?!」

「あなたがいなくなったのに気が付いたんですよ。……わかってますよね、これは命令違反」

「は、はい……」

「帰ったら……まあ、言わなくても大丈夫ですよね?」
「はいいいい!!」

あのカンナが怯えてやがる……!!

「それで、そのあなた。あなたもあなたです」

「は?」

「カンナは放っておくのが一番なのに、構ってしまうとは……。まさに愚の骨頂ですよ?」

「そこまで言うの!?!?」

「あなたは黙っててくださいね？」

「はい」

「それで、渚さん？」

「名前を知ってるってことは、お前もカーズとかいう奴の手下か？」

「……………どうしてそれを？」

ユウキと呼ばれた男は、一瞬驚いたような顔をした。

「カンナだけど」

「カンナさん……………？」

「ヒイヒイヒイ！！」

「覚悟しておいてくださいね……………？」

「……………はい」

「さてさて。確かに渚さんの言う通り、私達はカーズ様の手下です
で、その手下さんが俺を監視してるってか」

「はい、その通り。カーズ様が大変あなたの事を気に入ってますね」

「誰なんだ、カーズって……………」

「まあ、近いうち分かるでしょう」

「は？」

「さて、私達はこれで」

「ちよ、待てよ！！」

俺が呼びとめるのも聞かず、ユウキは消えて行った。

「じゃあ、私もこれで。じゃあねー、ちゅっ？」

投げキッスを残し、カンナも消えて行った。

残された俺は、ひとりおいて行かれた感が半端ない。

「……………なんだっただよおおお！！」

俺は深夜にも関わらず、大声で叫んでしまった。

別れ、そして出会い!?(後書き)

今回は長めです。

つか、某格ゲーのヒヤッハーいってるハ○マさんみたいになっちゃった……

イメージして作ったら、こんなことに……

感想バッチコオオイ!!

いかさま野郎と元気っ娘!?

カンナ達と出会った日から、一週間が経った。

俺達は今、ギルドに来ていた。

「良い依頼って、なかなか無いね」

「そうだなあ。つか、女三人は何をしてんだ？」

「向こうで待ってるってさ。こういうのは、僕と渚にまかせるって」
「なんだそりゃ」

とりあえず、適当に選んで依頼を受けておいた。

「では、明日の正午に広場にお集まりください」

「わかった」

「今日は、これからどうする？」

「そうだなあ。……ん？あいつ、何してんだ？」

「ん？」

俺達の目の先には、リリイが見知らぬ男とカードをしていた。

周りには、静香とユリウス、それと見知らぬ女がいた。

「リリイは何してんだ？」

俺達は近づいて、静香に聞いてみた。

「あ、ナギ。それがリリイったら、あの男の人の挑発に簡単に乗っちやって……」

「で、ポーカーで勝負と？」
「そうなの。でも、ボロ負けで……」

俺達が声を潜めて話している間にも、リリイはまた負けてしまった。

「何故だ、何故勝てん……」
「どうしたー、嬢ちゃん？さっきの勢いはどこ行ったー？」
「くっ……」

ここまで黙っていたクロノが、突然声を出した。

「あの、僕とやりませんか？ポーカー」
「ん？なんだー、少年？仇討ち？」
「まあ、そんなところですね」
「いいぞ。で、掛け金は？」
「そうですねえ。では、お互い銅貨百枚ずつで」
「いいねえ、手頃な感じが」

リリイはクロノに席を譲り、クロノが席に着いたところで、お互いに銅貨百枚をテーブルに置いた。

「じゃ、カード交換は一回な」
「分かりました」

そして、クロノ無双が始まったのだった。

「フルハウスだ」

「こっちはロイヤルストレートフラッシュですね」

「くそっ、またかよ!!!少年、いかさましてないか?」

「どうしてです?」

「十回連続でロイヤルストレートフラッシュって、普通ありえないでしょ少年」

「もしいかさましてるとしても、いかさまをしていた人には言われたくないですね」

「な、なんの事かな?」

「さっき、リレイさんとやってた時、いかさましまくってたでしょに」

「ルキってば、言われてやんのー」

「笑ってんじゃねえよ!!」

「なあにー、八つ当たりー？恰好よくないよ？」

「うっせーな、この馬鹿ミリィ」

「なにおう!!この馬鹿ルキ!!」

「あー、お二人さん。言い合いは後にしてくれ」

「そうだねえ。渚の言う通りだよ、いかさまさん」

「『いかさまさん』じゃあねえ、少年。俺はルキ・ルヴェルグだ」

「僕も少年じゃなくて、クロノ・ノワールです」

「クロノ・ノワールか。良い名前だ、少年」

「少年じゃないって言ってたじゃん。ごめんねークロノ君。コイツ、
ヴァア力だから」

「んだと、てめっ。このヴァアア力!!」

「……死にたい？」

「……三十六計逃げるに如かず!!」

そう言って、ルキはギルドから走り去って行った。

「あーあ、行っちゃったよ。ごめんねえ、皆さん。あ、私はミリィ・
サクワイア。じゃねー」

ミリィもまた、ギルドから走り去って行った。

「なんだったんだ……」

「さあ？」

「まあ、ミリィさんの仇討ちもできたし、今晚はパーティーとなんか
食べよう」

「クロノ、たまには良いこと言っな」

「たまには、ってどういう意味かな？」

「そのまんまの意味だ」

俺達は馬鹿な会話をしながらギルドを出て、宿に向かっていた。

s i d e
ルキ

「いやあ、楽しかった」

「なーに呑気な事、言ってるのよ」

ギルドから離れた路地裏で、俺達は合流した。

「別にいいじゃん、楽しかったんだから」

「まあ、確かに興味をそそられる事はあったけど」

「誰に？」

「ユリウスちゃんかなー。あの魔力は、人間じゃありえない程の強さだった」

「そうか、俺は嬢ちゃんだな」

「リレイちゃんかあ。確かに、ルキが好きそうな雰囲気だったねえ」

「言っておくが、惚れたわけじゃねえぞ」

「分かってるって」

「さ、帰ろうぜ。そろそろ、準備しないといけないんだろ？」

「そうだねえ」

俺達は闇に溶け込んだ。

s i d e o u t

(おまけ)

「酒持つてこーい!!」

「渚、飲みすぎ!!」

「フハハハ!! お前も飲め!!」

「ちょ、ゴボゴボ!？」

「静香達も飲めえ!!」

「ナギ!? 皆、避難して!!」

「ばたんきゅー……」

「クロノ君!? クロノくううん!!」

渚は、酒癖が最悪だったそうなの……。

いかさま野郎と元気っ娘!?(後書き)

久しぶりの更新

次回、カース以外の奴を紹介したいと思います

感想いただけたら、光栄です

某格ゲー風キャラ紹介?!?

ユウキ 25 魔族 (CV: 中村悠一)

戦闘スタイル: ウロボロス

体術

身長 : 178

体重 : 67

血液型 : 不明

出身地 : 不明

誕生日 : 9月30日

趣味 : カンナ達の拷問

大切なもの : なし

嫌いなもの : 無能なヤツ

・性格

常に飄々としている。

口調は丁寧だが、考えていることは残酷。キレると口調が変わる。

・見た目

黒いコート・黒いハット・黒いズボン

黒いタイ・白いシャツ・茶色のベルト

シルバーアクセサリ

緑色の髪、金色の目 要はハ○マさん

カンナ・ミラージュ 24 魔族 (CV: 朴?美)

戦闘スタイル: 弓

体術

身長 : 168

体重 : 48

血液型 : 不明

出身地 : 不明

誕生日 : 2月27日

趣味 : いい男を視姦する

大切なもの : いい男

嫌いなもの : いい女

・性格

いい男を見ると、暴走してしまう。

いい男の前では、色っぽい声を出し、誘惑する。

女の前では、口調が変わる。

・見た目

藍色のロングドレス

紫がかったロングヘア

碧い目

ルキ・ルヴェルグ 25

(CV: 森川智之)

戦闘スタイル: 体術

妖術

身長 : 187

体重 : 69

血液型 : 不明

出身地 : 不明

誕生日 : 5月7日

趣味 : トランプ

大切なもの : リリイ

嫌いなもの : ユウキ

・性格

自分の興味を惹かれたもの以外は、どうでもいい。
トランプのみ、長年続けている。あと、いかさまも。
仲間の中でも、リリイとだけ仲良くしている。ユウキを苦手として
いる。

・見た目

タキシード、白い手袋
長めの黒髪を後ろでまとめている。
赤い目 要はティ○さん

リリイ・サクワイア 20 魔族 (CV:小清水亜美)

戦闘スタイル:魔法

身長 : 148

体重 : 43

血液型 : 不明

出身地 : 不明

誕生日 : 6月27日

趣味 : ルキと遊ぶ

大切なもの : ルキ

嫌いなもの : ユウキ

・性格

非常に元気で、ルキをからかうのが大好き。
カンナとはそこそこ仲がいい。ユウキは苦手。
ルキと遊んでいるため、カードはそこそこ得意。

・見た目

黒いタートルネック、青のショートパンツ

髪は赤く、ハーフポニー

水色の目

某格ゲー風キャラ紹介?!? (後書き)

以上です

男性陣が、ハ○マさんとティ○さんになってしまった

では、感想いただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7297s/>

召喚されただと!?

2011年7月11日16時37分発行